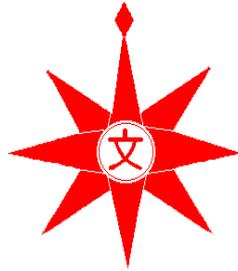


平成28年度
運営諮問会議報告書



鳥羽商船高等専門学校

運営諮問会議委員名簿

(五十音順)

氏名	現職	備考
池田 栄	鳥羽市小中学校校長会会長（鳥羽市立鳥羽東中学校長）	(新)
井上 欣三	国立大学法人神戸大学 名誉教授	
木場 郁夫	鳥羽商船高等専門学校奨学後援会会長	
田中 三郎	みなと総合研究財団 首席研究員（同窓会会長）	
本田 直基	美和ロック株式会社 伊勢工場群総務部長	
村川 悟	(公益財団法人) 三重県産業支援センター 産業振興課長	
山本 俊彦	国立大学法人三重大学 理事・副学長（教育担当）	

※ 委嘱期間 平成27年6月1日～平成29年3月31日

平成 29 年 3 月 16 日

平成 28 年度 運営諮問会議資料

- 1 平成 28 年度 鳥羽商船高等専門学校運営諮問会議次第
- 2 運営諮問会議委員名簿
- 3 運営諮問会議座席表
- 4 平成 28 年度 年度計画達成状況 資料 1
- 5 平成 28 年度
「鈴鹿高専との連携・共同事業推進計画」実施状況 資料 2
- 6 平成 28 年度 学校要覧
- 7 学校だより V01. 8 4、V01. 8 5
- 8 2016 学校案内
- 9 学生活動・トピックス等（新聞記事・ホームページ）

平成 28 年度 運営諮問会議

○委員及び列席陪席者の紹介

- 司 会：失礼いたします。それではお時間でございますので、開催させていただきます。
- 出席予定の方、全員おそろいになりましたので、ただ今から平成 28 年度運営諮問会議を開催させていただきます。本日はご多忙のところ、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。進行を務めさせていただきます総務課課長補佐の谷と申します。どうぞよろしく願いいたします。
- 委員の紹介をさせていただきます。本日は外部委員 7 名の先生方のうち 3 名の先生方が出席していただいております。資料にあります名簿順にご紹介させていただきます。鳥羽市小中学校校長会会長、鳥羽市立鳥羽東中学校の校長先生でいらっしゃいます池田先生です。平成 28 年 4 月より現職でございます。今回初めての出席でございます。
- 池 田：すみません。鳥羽東中学校の校長の池田と申します。よろしく願いいたします。長らく鳥羽市内の中学校でずっと勤務をしておりました。鳥羽東中学校、加茂中学校、答志中学校という。本当に鳥羽商船さんの方は自分の頃というのは、全寮制で鳥羽市内の生徒も同級生もみんな寮に入っている時代から教員になってからいわゆるコンピュータ関係の電子機械、それから制御情報、そういうのができた時代っていう一連の流れをずっと私も一緒に歩ませていただいたかなというふうに思います。本当に毎年いろいろお世話をおかけしておりますし、たくさん先生方にもお知り合いを得ることができました。本当にお世話になっております。よろしく願いいたします。
- 司 会：ありがとうございます。次に国立大学法人神戸大学名誉教授井上先生でございます。井上先生には本日議長を引き受けていただいております。
- 井 上：井上でございます。どうぞよろしく願いいたします。
- 司 会：はい、ありがとうございます。次に公益財団法人、三重県産業支援センター産業振興課長でいらっしゃいます村川様でございます。
- 村 川：産業支援センターの村川です。よろしく願います。
- 司 会：どうぞよろしく願いいたします。なお、本校奨学後援会会長木場様、みなと総合研究財団主席研究員ならびに本校の同窓会長であります田中様、美和ロック株式会社伊勢工場群総務部長の本田様、国立大学法人三重大学理事・副学長でいらっしゃいます山本先生の 4 名の先生方は本日所用によりご欠席となっております。

次に本校の出席者につきまして座席順に掲載してあります教職員を列席陪席させていただきます。順に紹介させていただきます。校長の中央でございます。校長の新田でございます。

校 長：新田です。よろしくお願いします。

司 会：その隣になります。副校長の石田でございます。

副校長：石田です。よろしくお願いします。

司 会：学生主事の坂牧でございます。

坂 牧：坂牧です。よろしくお願いします。

司 会：寮務主事の嶋岡でございます。

嶋 岡：嶋岡です。よろしくお願いいたします。

司 会：研究主事の鈴木でございます。

鈴 木：鈴木です。よろしくお願いいたします。

司 会：専攻科長の宮崎でございます。

宮 崎：宮 崎です。よろしくお願いいたします。

司 会：事務部長の菅野でございます。

菅 野：よろしくお願いいたします。

司 会：総務課長の入吉でございます。

入 吉：入吉です。よろしくお願い致します。

司 会：学生課長の梅村でございます。

梅 村：梅村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

司 会：総務課企画・地域連携係長の中村でございます。

中 村：よろしくお願いします。

司 会：よろしくお願いいたします。開催にあたりまして、本校校長、新田からごあいさつをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

校 長：本日は年度末の非常にお忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。それから池田様には新しく運営諮問委員ということで非常に感謝しております。また井上先生、村川さんにおかれましては、引き続きご就任いただきましてありがたく存じております。

さて、簡単に近況を報告いたしますと、本校の来年度の入学者状況。明日が一応締め切りですけれども、今順調に推移しております。今年度も志願者が 192 名で昨年度が 199 名でしたので 15 歳人口が減少する中でも非常に志願者としても善戦しているなど思っております。定員 120 名のところ現在 124 名が入学を希望しております。当たり前なことなんですけれども、定員割れはないと。高専も北の方に行きますと、定員が維持できるかどうかしんどい所がありますけれども、幸い本校は順調に推移しております。

それからついこの前、3月12日に電子機械工学科と制御情報工学科の卒業式。それからシステム工学専攻の修了式がございました。無事終了いたしました。その中で皆勤賞とか精勤賞を出すわけですがけれども、合わせて学術面でも非常に貢献した学生に表彰させていただきました。特筆すべきは学会賞として、日本機械学会の畠山賞をM科の5年生が機械関係ですけれどももらっている。それから工業の英語能力検定で文部科学大臣賞も電子機械工学科の学生が授与しております。非常に素晴らしいことで校長としても喜んでおります。

また、今年度のいろいろな面で学生が、あとでまた報告しますがけれども学生が頑張っていたいただきました。全国高専のプログラミングコンテスト、本校が今年主幹したんですけれども、その中で本校のチームが10部門でトップになりました。文部科学大臣賞を受賞しております。それから全国高専ロボコンも地区大会で優秀な成績を修めて、全国大会に出場ということで出場いたしました。国技館に行っていました。それからカッター一部が水難救助をしまして、水上バイクが漂流しているのを助けたということで、鳥羽海上保安部から表彰を受けましたし、高専機構からも理事長賞を受けるという予定になっております。

そういう非常にいい面があるんですけれども、一方で去年もここで申し上げましたけれども、運営費、交付金の削減が1パーセントずつ毎年来ております。止む予定は全然無いということで、これは国立大学等々もそうですけれども、1パーセントといたしますのは全国高専で5億円になりますから、本校で1千万ぐらい毎年減ると。そういう中で研究教育の質を維持するために教職員一同頑張っておりますけれども、特に外部資金、特別教育研究経費との獲得で分野別到達目標に対するラーニングアウトカム評価とか海事人材育成プロジェクトなんかを獲得して、先ほど言いました収入の減にこれで補ってプラスにしているという状況でもあります。それからこれから動き出しますけれども、来年度に向けては“KOSEN(高専)イニシアティブ 4.0”という新しい競争的資金というのができて、それに今挑戦しているところでございます。その内容についてはあとでまた副校長が紹介いたします。そういうことで、非常に厳しい中でも頑張っておりますけれども、来年度はさらに工業系2学科を高度化するということで平成31年度実施に向けていろいろ計画を進めようと思っております。

それから、この場を借りまして個人的なことですが、個人的といたしますか、私のことですが、2年間校長をやらせていただきました。鈴鹿高専と兼任ということですが、来年度は兼任が解除されまして鈴鹿高専1校に専念するという中で新任の校長が神戸大学海事科学研究科教授の林先生が来られることになっております。来年度はそういうことで新しい体制でまた進みますのでご支援、ご協力のほどよろしくお願ひしたいと思います。以上で校長の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願ひいたします。

司 会：次に学校概要説明を校長からお願いします。

校 長：すみません。パワーポイントを使って学校概要を説明させていただきます。井上先生には去年も同じような説明をしたので恐縮なんですけど、初めての方がいらっしゃるので紹介したいと思います。全国高専は先ほど国立が 50 といいましたけど、正確には 51 校で 55 キャンパスあります。仙台、富山、香川、熊本が 2 キャンパス持っているものですから、そういう状況で公立、私立入れますと全国で 57 校ということになっております。

そういう中で商船学科のある高専は 5 高専でございます。富山、それから瀬戸内海に 3 高専あって、鳥羽ということでございます。鳥羽商船は真上から見ますと、こういう状況で学校の下の方には鳥羽丸、船が艇庫でございますけれども、校舎地区と寮地区と鳥羽丸、それから艇庫というようなことになっております。近鉄、JR が間を走っております。

高専教育システムの特長といいますのは、15 歳で入学して工業系の高専ですと 5 年で修了します。最初は高校と同じように一般科目重視でたくさん入ってきますが、すでに 1 年後半ぐらいから専門科目も入ってきて、楔形教育をやるということで。出口では非常に高度な実践的スキルを持った、しかも学術的にもレベルの高い人材を育成するということを狙っております。

それで、こっちの商船学科の方は大型練習船実習と書いておりますけど、トータル 1 年間の実習をやって 5 年修了後には半年間、実習に出てきて 9 月に卒業ということになっております。国際性の育成、キャリア教育。本校のセールスポイントはそういう中で伝統があると。1881 年に創設されましたけれど、そういう意味で 130 年以上の伝統を持っており、同窓会活動が充実している。卒業生も非常に強い味方になっております。立地条件もいいということで、また進路も工業高専に比べて入学しやすいけれども、これはちょっと説明しませんが入りやすいという。進学就職先は同じという。同じように倍率が高くて、皆さん、就職希望のところに概ね就職しております。

1881 年にそういう鳥羽商船学校が開校ということで、これを最初にして、鳥羽の町立、それから三重県立等々を経ております。それがそういう当事の写真です。そこから昭和初期になります。この時全国商船学校の 11 校が文部省の認定を受けるということで十一会ということで今も活動が続いております。

戦前がありまして、戦後に飛びますと、1951 年に現在の形が概ねできます。鳥羽、富山、大島、広島、弓削で商船学校が国立の商船高等学校として文部省に移管。そのあと、1967 年に鳥羽商船高等専門学校が開校するということです。それから商船学科から電子機械工学科、制御情報工学科が分かれて現在の 3 学科体制になります。そのあと、専攻科が 5 年のあと専攻科が 2 年間設置されてトータル

で7年間になりますけれど、それが2005年ということで10年以上前にできました。

教育理念としては、進取・礼譲・質実剛健。教育目標はここに創造性が抜けておりますけど、人間性。創造性。国際性。教養人。技術者。社会人というそういう贅沢というか、かなり欲張った目標を掲げて頑張っている状況です。本校の規模は学生定員が1学年120名ですので、それに応じて。ただし商船学科がありますから、工業系より技術的にはたくさん教職員がいるという状況でこのように教員が52。事務職員等が43。トータル95名ということになっております。

それから学生定数は先ほど言ったように、40、40、40ですけども商船学科が航海と機関に分かれております。学年で実人数は凸凹がありますけれども、トータル665人という状況です。専攻科はトータルで23名という状況です。

入寮状況は、留学生が現在ラオス、モンゴル、インドネシアから4名来ておりますけれども、彼らを入れて629名が全体ですけども、その196名。約200名が寮生という状況です。現在、かなり今年もヒヤヒヤしているんですけども、寮希望者が多いので溢れたら困るなという状況で今ちょっと心配しながら見ております。

それから、地域と学生との関係ですけども、先ほど池田校長先生からもお礼の言葉がありましたけれども、鳥羽からも来ていただいております。志願者は鳥羽市内。鳥羽が7パーセント。13人で実質的には少ないんですけど、県外が22パーセント。44人です。そのあとは県外と。入学者は鳥羽市内が10人。8パーセントになります。ただ、鳥羽市の中学校卒業生145人中、昨年3月時点では鳥羽高専志願が9.0パーセントですので、非常に多いと。入学も7パーセントです。全国的には、全国で国立高専は約10,000人が入ってきますけれども、中学卒業生からいうと1パーセント弱になりますから、入学者から見ると鳥羽市関連の中学校から約全国の7倍ぐらいが来ていただいているという状況で本校としてもありがたく思っております。

それから卒業後の進路は、就職は8割。一番近々の27年度はそういう2割が進学ということで、進学では東京海洋大学、豊橋技科大、長岡技科大等行っております。就職はかなり大手にたくさん行っております。学生の就職状況で、地域でどのくらいかといつもこれ最近では地元に着率を高めんとあかんと言われております。やはり少し少ないです。平成27年度、学科的には5.5パーセント。県内就職率が。前年度は15.6パーセントですけど、どっちが先かという話がありますけれども、私どもも県内に良い企業があったら、積極的に就職してもらおうように呼びかけておりますが、三重県の南部はまだまだ企業が少なく状況でございます。

それから商船学科は先ほど言いましたが、航海、機関に分かれてこのような絵を掲げておりますけれども、世界的に活躍する船員さんを育成していくという大きな任務を負っております。

それから電子工学科はさきほどロボットの話をしましたけれども、主に本校とすればここがロボット関係で頑張っております。

それから制御情報工学科はよく新聞にでますけれども、プログラミングコンテストで非常に頑張って、全国的にもトップを走っております。

専攻科は海事システム学専攻と生産システム工学専攻の二つに分かれております。工業系と商船系になります。進路状況はダブりますので省略します。ちょっとこれも細かいのでまた見ていただけたらと思います。

練習船は「鳥羽丸」が 244 トンでございます。小さいのが「あさま」でこれも平成 6 年ですので、20 年以上経っているのでそろそろ交代の時期というか、お金があるんですけども考えていく段階に来ております。

それから国際交流も活発にやっております、つい最近シンガポールからの MEL キャンプから帰ってきた途端、今度はハワイです。ハワイとの関係も強めております。いろいろなところに学生も行っております。

それからプロコンは先ほど言ったようなことでいろいろな賞をもらっております。ロボコンはここに書いてあります。それから機械系では最近航空宇宙の分野にもそういう技術者、就職できる技術者を育てようということでもいろいろ一歩踏み出しております。これが主な受賞の内容です。

それから他高専との連携は鈴鹿高専と連携を密にしておりまして、これもあとで報告がありますけれども、いろいろな面で協力をしようということで進めております。

それから東海北陸近畿の高専とも連携して進めるということで第三ブロックというのを発足させて、今いろいろな面で教育、研究、人事、管理等で交流を深めております。以上でございます。どうもご清聴ありがとうございます。

司 会：ありがとうございました。配布資料の確認および日程説明をさせていただきます。まず資料の確認でございます。お手元にすでにお配りしております資料でございますけれども、まず一番上にガイドの資料の項目が書いてあるものがございます。2 枚目以降でございますけれども、まず式次第でございます。その次に外部委員の先生方の名簿をつけさせていただいております。次に座席表でございます。本日もご出席の方々の座席表をまとめてございます。次に右肩に資料 1、資料 2 と付けさせていただいておりますけれども、資料 1 につきましては、平成 28 年度年度達成状況でございます。資料 2 につきましては、平成 28 年度「鈴鹿高専との連携・共同事業推進計画」実施状況でございます。

次にここからは学校の刊行物になるのですけれども、平成 28 年度学校要覧をつけさせていただきます。それから次に学校だよりということで学校のトピックスなどをまとめた冊子でございますけれども、年 2 回ほど発行しております。84 号、85 号をつけさせていただきます。

次に学校案内でございます。学生向けの学校冊子でございますけれども、2 部、2 種類のものをつけさせていただきます。最後に学生の活躍ということで新聞記事、それから学校でのホームページに掲載した内容をまとめたものを冊子にしましてつけさせていただきます。ご確認のほどお願いいたします。

本日の日程につきましては、式次第の通りになっておりまして終了時間は 16 時半頃を目安としております。議事がスムーズに進みますようにご協力のほどよろしくお願いいたします。

また、終了後に報告書の作成、またホームページへの公開ということで録音もさせていただきます。また写真の方も撮らせていただきますので、ご了承のほどよろしくお願いいたします。それでは井上先生、議事のご進行のほどよろしくお願いいたします。

井 上：それではあらためまして井上でございます。今日は議事の進行を務めさせていただきます。ご協力をよろしくお願いいたします。

鳥羽商船高専の運営諮問会議というものに関わらせていただいて山田校長のときをお願いされて以降続けているのですが、ここにきてこの運営諮問会議の規約というものについて、もうひとつ現実に沿っているのかどうかというのがちょっと気になりまして、ひとつは今日出席の方は 7 名中 3 名なんです。3 名を切っておられてそのような状況でも議事が成立するのかどうかということは運営規約にどうも記述されていないというような雰囲気です。そういう意味ではここでお話いただくことが、議事録等に掲載されて報告書に配布されることになろうかと思うのですが、この委員会の成立要件みたいなものがないというのはどうかという気もしますので、今後また長期的にご検討願えたらなと思います。

それから、私自身が山田校長のときをお願いされてからこの運営諮問委員を務めさせていただきます。委員の任期、期限というようなこともどうもないのかもしれないなど。今後に向けてその辺のところもどうされるのか。運営諮問会議を運営される鳥羽商船高専の事務局レベルで今のようなことを含めて、規約の充実というところをご審議願えればなと思っていますところ。数日前にお電話で出席者の状況をお聞きしたときにちょっと気になったものですから、発言させていただきました。

本日は、いつもどおり教務主事の方から年間の計画達成状況等を説明していただいて、あとご出席の委員の方々からそれぞれお考えの点と意見を述べていただく手順を進めたいと思います。それでは石田先生の方からこの資料 1 について説明をお願いします。

副校長：はい、本日は年度計画達成状況について私の方から報告ということになっていたのですが、すでにこの達成状況報告につきましては、皆さま方に事前にお送りしてお目通ししていただいているということで、もしこれに内容につきまして意見等々ございましたら、まず先にそれを伺ってそのあと本日は例年通りということではなく現状と課題ということでざくばらんに私のほうから本校の洗いざらいって変ですけどお話したいと思っております。

井 上：分かりました。実は前回私のほうから発言いたしまして、説明が長くて 8 名ほどの出席者のご意見をみんな網羅できなかった点を反省しまして、次回からは石田先生には事前配布資料についてはあまりこと細かく説明してもらわなくてもいいよというふうに申し上げたところだったんですけど、今日はちょっと全く真逆なような状態になりましたので、でも事前にいただいている資料についてはお目通しいただいていると思いますので、今石田先生の方からご説明のあったようにこの内容について何か疑問とか説明補充等があれば申し出ていただくという形で処理したいと思うのですが、いかがでしょうか。

次回以降は、多分もう少し参加者も増えると思いますので、何か時間の調整のしわ寄せを石田先生にもたらしようなやり方はよくないと思うので、できるだけ多くの出席の方々にご意見を伺ったほうがいいかなという思いもあったので、ちょっと斟酌していただければと思います。

それでは、またおいおいこの内容について関連する質問等が出てこようかと思っておりますので、これは事前に見せていただいたということでさせてもらって、次の資料 2 についてご説明願えるのでしょうか。

副校長：資料 2 につきましても、私のこちらのパワーポイントを使った説明の中で話をさせていただきます。先ほど申しましたけど、今回は現状と課題ということで、正直本校としてちょっとお恥ずかしい部分もお話をさせていただいて、本校の教育改善に向けて何かアイデアなり、お知恵をいただければということで話をさせていただきたいと思っております。

今日の内容ですが、新しく 28 年度に動き出したこともありますので、その辺も含めて、特に教育・研究というのが本校の趣旨ですけれども、教育を中心に話をさせていただこうと思っております。

大学側はすでに設定しているんですけども、高専機構の方も 3 つの方針。教育における 3 ポリと言われるものですが、これを各学校で制定しなさいということで、本校もつい先ごろ制定したところであります。3 ポリというのはまずはアドミッション・ポリシー、どういう学生を受け入れますかということで、これはもともと本校も持っていたのですが、学校のアドミッション・ポリシー、それから各学科のアドミッション・ポリシー、それから専攻科。それぞれ設定しております。さらに 4 年生の編入枠も受け入れておりますので、そのためのアドミッシ

ョン・ポリシー。それから留学生向けのアドミッション・ポリシーというものも想定しています。ただ本校のもともとあるアドミッション・ポリシーを念頭に置いてこれらは作られているという具合にお考えください。

それから次にどういった学生を卒業させますか。もしくは修了させますか。そういう認定をしますかというのがディプロマ・ポリシーですがここに書いてある各学科、もしくは専攻科のやつはもともと教育目標というところで掲げているものであります。この下に本来の達成度。どこまで達成したらいいですかというのはずっと実はあるんですけども、それがディプロマ・ポリシーということで制定させていただきました。近々本校のホームページにも載ると思いますので細かい所は申し訳ないですがそちらで見ただけだと思います。

もう一つ入れて出すまでの間どういう教育をするんだというのがカリキュラム・ポリシー。ここにちょっと絵をポンチ絵で示してありますが、例えば商船学科ですと基礎から始まって、専門にいったということ。その他にかたやキャリア教育ですとか国際交流プログラムが動いている。こういう過程をふんで卒業していきます。

それから電子機械も同じようなことで、ただ電子機械か制御情報工学科というのは創造性を育むことも非常に重要ですので、この辺等に PL だとか PDL だとかいうものが入ってきます。特にこういう形です。入ってくるというのが大きな特長だと。

それから専攻科ですが、専攻科は 2 つの専攻を持っていますので、基礎的なところを踏まえてそれぞれの学位をどの分野で取っていきますかというところで分かれています。こういうカリキュラム構造になっております。こういったとこの 3 つのポリシー、3 つの方針を決めたところでありあります。したがって、今後これに基づいて本校の教育が進んでいくということになります。

次に一番本校にとって最重要課題であります、今日校長の方から本年度の概要を説明していただきましたが、入学者の確保、これが最大の本校のテーマで毎年そうなんです、そのために学生募集とか PR など例年通りのことをやってまいります。

それから学校説明会をやっています。一つのデータとして、この学校説明会の参加者の数ですが見ますと少し右上がりでちょっと増えてきているということで、これを見ますと学校数も増えていきますので徐々にですが、本校に対して興味を持ってくださる数が増えていっているのかなというようなデータにはなっているところでもあります。

その他に商船系については 5 校一緒に 3 つの会場でガイダンスを行っていますし、それから広報の部分でいきますと公開講座なんかを開いています。

それから一昨年からですかね、理系女子を集めましょうということで、本校、それから鈴鹿、近大高専、それから三重大学という三重県内の教育機関が集まってフォーラムを開いて本校の学生が講演したり、ポスター説明をしたりというところをやっているところでもあります。

あとは「鳥羽丸」を使った PR 航海。それから同窓会を中心として行われていきます故郷の海を愛する会。これに協賛して本校がいろいろな行事をご一緒にさせていただいているということをしています。

あとはマスコミに、マスメディアにいかにかに露出していくかという部分も一生懸命やっているところでもあります。大きな一つ改革させていただいたのは、今日お配りしましたが新しいパンフレットを一新しました。中学校を回ったところでは聞いたところでは、そこそこ評判はいいという話は聞いておりますので、まあまあ良かったかなというふうに自画自賛ではないですが思っております。非常に見やすく、写真が多くて学生目線でいろいろ書き込んでいるのでいいのかなという感じはしております。

入学というか、受験の時に受験生にアンケートをとらせてもらっているのですが、まず今の話でいくとどこでうちの学校を知りましたかって聞きますと一つには人から聞いたっていうのが非常に多いです。特に親からや学校の先生からが多い。もう一つは何かを見てっていうのです。例えばポスターですとかホームページとか。あとは見て聞いて実際に体験したということで学校説明会に来たよと。だからこの辺を踏まえて PR 活動を練っていく必要があるんだろうという気はしております。

それから実際に受験を決めた理由はなんですかと聞いているのですが、もうまさに就職を意識して、就職を念頭に決めましたというのが大方の受験理由になっているところなんです。ですからこういったところを意識して PR 活動もする必要はあるのかなという気はしております。

入試制度ですが、アドミッション・ポリシーというのを先ほど 3 ポリの中に示しましたが、アドミッション・ポリシーにのっとって学生を入れなさいということになるわけですが、本校が実施している体験学習選抜と推薦選抜につきましては、これはそういった問うところもありますので、かなりアドミッション・ポリシーに沿った学生を入れることができます。本校の場合はこれでほぼ 85 パーセント確保するようにしているのですが、問題は学力試験で入れる学生が成績だけでアドミッション・ポリシーを満たしていることになるかというこういう問題があります。ということで、本校のアドミッション・ポリシーをよくよく考えてザクツといえば、例えばここに書いてあります社会人基礎力。それから経産省が提唱しているものですが、それからまたは人間力。こういったものを学校に入ってから育成するわけですが、そのための素地をどれだけ持っているかを見る。そうい

うことにつながるんだろうと思います。人間力というところをある文献を見ても基礎学力だったり、論理的思考力だったりコミュニケーションスキル。こういったものでしょうねと。これが要素だねということです。ではこういったものの素地を持っているかどうかをどうやって見ましょうということで本校の場合はどうしたかという、高校受験の時に三重県の調査書にはこういった9科目の科目の中に観点というのがある、ここを記入することになる。さらに行動のところでもいろいろな評価をして出してもらっていることになる。それぞれABCでつけることになっていますので、このABCで付けられたものをある程度点数化してやれば、今言ったようなアドミッション・ポリシーに沿った学生かどうかはある程度評価できるでしょうということで点数化して評価の対象としています。ちなみに恐らく中学校の先生がCと付けるのはよっぽだよねというような考えもありまして、Cについてはかなり低い評価をつけさせていただいております。

さて、その志願者状況ですが三重県内の中学校の卒業生はどんどん減っています。特に南の方は非常に減っています。こういう状況です。それに対して本校の志願者はどうなっているかということこれが全志願者数です。22年からの統計になっていますが、やはりこれが先ほどの三重県内の全中学生の卒業生ですが、同じような形で推移していると。

他の試験で見ますと学力、推薦、体験。推薦は大した事ないのですが、微増でちょっと推移している。学力は、28年度はちょっと上がって今回はちょっと下がったんですが、こんなものでしょう。体験という試験を設けているのですが、実はこの年に出願資格を変更しました。それまではオール3以上。81以上あればいいというだけの条件だったんですが、ここから主要5科目については2、1があっちはいけないという具合にちょっと厳しくしました。ということでちょっとこれが目減りしたのかなというような印象をうけています。

倍率で見ると一番馴染み深いと思うのでちょっと見ますと、全国と比べるとどうなのと。このオレンジが全国です。だいたい同じようなことで、1.8前後で推移してきていますが本校がこの緑。大体全国平均ぐらいで推移していると。その中を学科で見ると、商船もちょっと低いところで推移していて制御がちょっと高い。電子がちょっと一時期多かったんですが、ここ全国平均ぐらいのところに落ち着いてきているというような状況です。それぞれの志願者を受験別で見ますと、先ほどのように学力は制御情報が高いけれども、M科、S科はちょっと落ちてきましたねという。

推薦の方はどうかということちょっと上がり気味かなと。試験はちょっとここ落ちていますが、上がり気味かなと。やはり体験は先ほどのところでこの辺からその前からちょっとわりじわりと落ちてきてはいるんですが、かなり少なくなってきたという状況になっている。

ではこういった志願者を受験してもらって学校に入れました。学校に入れたときの学力はどのくらいの学力の学生が入ってきているのでしょうかということですが、調査書の数値で見ますと、まず学力は S 科がこれです。M がここ。I は要するに制御情報ですが、ぐーっと高いところに位置します。学力は。それに対して体験はほぼ 3 学科とも一緒です。推薦もだいたい 3 学科ほぼ一緒です。ということでちょっと商船学科、電子機械工学科に対して制御情報工学科の入ってくる学生の学力はちょっと上に上がっているという状況になっています。

それから入試の成績ですけれど、これは 500 点満点です。実際に合格した学生の平均点はどれくらいなのかなと見ますと、先ほど言ったように当然制御情報工学科は高いのですが、S 科と M 科はかなり低いと思います。

先ほど校長の話しに入りやすいという話がありましたが、そういった意味ではここある程度反映しているという話ではあるのですが、そういった学生を受け入れて、教育しているということをまずご認識いただいて。では入ってきました。きちんと進級させていっているのでしょうかというのが、これが非常に大きな問題で、実は機構本部の方から大学とか高校かなんかに比べても高専の留年、退学率が非常に高いと。これを何とか減らしてくださいというのが指示としてきています。それに対して本校はどうなのというのを見てみたわけですが、これが全国平均と本校の留年。原級留置、通常留年とあって、実際は原級留置という言葉なのですが、これが全国平均です。だいたい 4.4 ぐらいか 5 ぐらいで推移しているところが本校では一応鳥羽さんいいですねと言われてちょっと減ってきたんです。ここまで、順調に減ってきたんですが、実はこの次の年、ちょっと上がってしまっているんですね。ただ目標値、本校の掲げているのには 3.5 パーセントです。ですからもう少し努力をしていかなければならないという現状です。では実際に中身を見てみると留年なので、実は 3 年生から 4 年生に上がるのに専門科目がぐっと増えますから、どちらかと言うとどの学科も 3 年生でちょっと敷居を設けて進級させようという考えがあります。したがって、3 年生の原級留置率結構高いのではないかというのが予想されるところで、実際にこの緑の線なのでそれなりに高いのですが、どっこい、何が高いかというと 4 年生が高いです。これが。これは 4 年生がなぜ多いのかというのが今後うちの学校の中で検討していかなきゃならない大きな課題ではあります。

あと 1 年生、これは 27 年度に 1 年生がぼんと上がっているのですが、ここは実は進級制度を変えました。その時に 1 年生が全科目きちんとクリアしないと進級できなかったのですが、その認識がちょっと甘かったのかなと。先輩からもう大丈夫だよみたいなことを言われて進級をなかなかきちんとできなかった学生が多かったのかなというようなちょっと考えを持っています。

学科別に見ると実は電子機械工学科が結構留年生を出している。これも学内で学科だけの問題だけではなくてちょっと検討していかなければならない課題だろうなと思っています。

では実際に学校をやめていっちゃう。いろいろな理由があるのですけれども、数字的な話に今日はとどめますがこれが全国平均です。大体 2.5 パーセントぐらい。本校もだんだん下がってきて、ちょっと上がりました。全国平均よりは上。ちょっと本校は高いです。ただし本校の目標値としては 2.5 というのを掲げているのでここに近づけるような努力をしなければいけないという具合に思っています。

やはり学年別に見てみると 3 年生を終わると高校卒業同等の資格がとれますので、3 年生でミスマッチも含めて辞めていく学生がいるでしょうということで 3 年生はそれなりに高い値を持っているのですが、やはりここも留年と一緒に 4 年生がやっぱり高い。これもちょっと考えていかなければならないことだろうなという具合に思っております。

学科別に見るとそれほど学科によって大きな差はないのですが、電子機械がちょっとここで高かったかなというのはあります。そのへんは最近になってくると改善されているのかなという気はしますが、全体的にいうと結構多い。

そういう具合にして育ててきた学生がどういう進学、もしくは就職をしているのか。先ほど校長のデータにもありましたが、就職と進学率で見ますとおおかたの学生が就職していきますよということなのですが、これまで制御情報工学科の学生は比較的就職というより進学がちょっと多かったのですが、ここにきてちょっと進学率が下がっています。

もう一つ M 科、電子系工学科が進学率がずっと低い。ここを学校の商業面から考えるともうちょっと後押しして進学率を上げてくれるといいのかなという気がします。ちなみに商船学科は行ける大学が決まって、枠も大体決まっていますので、なかなか伸び率は望めないなというところ。

もう一つ実は、海上就職についてですが、これは 25 年に総務省の独立行政法人の評価委員会の方から高専機構に対していろいろ提言がなされたわけですが、その中で商船学科の海上就職が名指しで指摘されました。というのは、商船学科は船員を輩出するのが義務であるにも関わらず、6 割から 7 割程度しか海上就職していないとここまで言われたわけです。そういうのを受けて機構のイニシアティブを取って、その改善に向かいましょうということになったわけです。

これを見てみますと、去年 28 年度はかなり 90 パーセント近くの学生が海上就職してくれたわけですが、とは言え上下動が結構あるというところで、これについてもまだまだ改善の余地はあるというところでもあります。

ということで、ではどうやって改善していくのか。こういったものを上げるためにはどうしていくのか。先ほどの学校に入れてから学力をつけさせていくのは

どうするのか。学内でいろいろ議論してやっているわけですが、なかなかうまくいかない部分もたくさんあります。

ということで教育改善に関わる連携プロジェクトということで大学間、連携共同教育推進事業に平成24年から5年間、これに参加させていただきました。一つ、二つうちの学校が連携校として大きく関わった事業が二つあります。

一つは海事関係です。通常、海事人材プロジェクトと言われるものですが、これでもって海上就職を増やすという意図は当然ありながら、優秀な海事人材を作りましょうということでいろいろな改善プログラムを展開してまいります。

一つにはここに資質の涵養。本校が中心で実施させていただいたのがこの部分です。英語力向上のプログラム。ここを本校が主幹で担当させていただいております。当然他の学校と連携機関と協力してやらせていただいたわけですが、うちがリーダーシップを取ってやらせてもらったというところです。

それからいろいろなインターシップ。国際化、グローバル化を進めましょうということでここは広島が担当します。それから海事技術者に必要な知識と機能の育成ということで、高専生に適切な教材を作りましょうというのが一つと練習船をきちんと活用していきましょうということで検討してきました。上は大島、こちらは弓削が担当しております。

それからもう一つは実際にどういう教育プログラムを新しく展開していけばいいんでしょう、それをきちんと示す必要があるということでやってきたのがこれは富山が中心としてやってきたものです。最終的にこういうようなことが、これはニューマリタイムエデュケーショントレーニングという略なんです、グローバル化の部分とそれから海事技術者としての資質を養成する部分とこれもひっくるめてですが学びをきちんと力に変えていくそういった仕組みも必要でしょう。これが三位一体になっていかないとその高度化、実質化ができませんよねという取りまとめになっていて、新年度からここで開発した教育プログラムを実際に各学校の教育の中に実装していくということは今後展開していく予定になっております。

もう一つ大きく関わってきたのが、ここに書いてある「分野別達成度目標に対するラーニングアウトカム評価による質保証」長いんですが、これは函館が中心になって本校が連携協力校に加わりました。簡単にいうと学生の能力評価をきちんとしていきましょう。それからそのための教育、それから自学自習をきちんと改善していきましょう。それから高専というものをきちんと見える化していきましょうというようなプログラムです。学生の能力をきちんと図っていきましょうというのはこのCBTを使う。モデルコアカリキュラムMCCと書いてありますが、高専は全部の学校がこのモデルコアカリキュラムにのっかってカリキュラムが作られています。これにのっかった形で、どこまで達成しているかを見てい

きましょうというのをコンピュータベーステストティングでやると。それでもって、各学生が自己の弱いところを見つけたりして、なおかつ先生方も授業の方法を改善していきましょうとこういうサイクルでやっていきましょうということやってまいります。

それからもう一つは、学びの定着ということでは自学自習環境をきちんと作っていきましょう。それから授業もせっかく今 ICT があるのでそういったものをどんどん活用して効率的にやっていきましょうとそういった教育授業改善、それから家庭学習の改善をどんどんやっていきましょうというような研究・開発もやってまいります。

それからもうちょっと見える化ですが、各高専が特長をきちんと打ち出していきますよと。高専はよく金太郎飴だと言われるんです。どこの高専をとっても同じものだと。そうではなくて、きちんと特長を出して。これはうちの学校の一部、プロットタイプで作ってもらったものですが、こういったものをこの高専はこういうことをやっている。こういうところに特長があるというようなのをきちんと見せていきましょうというのがあります。

こういった教育の改善をしてきたのですが、実は平成 28 年の 3 月に文部科学省から高等専門学校の充実についてという報告書が出されました。それから 28 年の 6 月には、日本最高戦略 2016 が出されて、それをさらにもう一つあるのですが、それを受けて文部科学省のほうで、先ほど校長の話しにありました“KOSEN（高専）4.0 イニシアティブ”を立ち上げて各学校が今後の教育改善に取組むものを出してこいということでプロポーズすることになって、本校も一応 3 つ提案しました。まだこの結果が来ていないのですが、今後これが採択されるかどうかの話なのですが、これが“KOSEN（高専）4.0 イニシアティブ”です。実は、大きな柱は新産業の牽引する人材の育成、それから地域への貢献。それから国際化の加速、促進というのが大きなテーマですよということで、これのどれかに引っかかるような、もしくは 3 つでもいいのですがそれを軸に添えて考えてこいと言われたわけです。

この中にちょっとよく見ると何が入っているかということと海事への理解、促進。それからここの地域への貢献ということで海洋等。こういう海洋とか海とかの言葉が入っているのです。これは何かというと実は 28 年の 10 月に実は自民党のプロジェクトチームが高等専門学校における海洋人材の養成確保のための方策についてというレポートを出されました。それを実は文科省が受けて、それに対する反応、アクションということでこの海という言葉が入ったということをお聞きしております。

本校もこれを踏まえて、どういったものを出していただくかということ、一つにはこれです。ここにプログラミング教育と入っていますが、これを主軸に置いて

これは全学科共通に行うことによって、こういった機械でしっかり海事も含めた分野で論理的思考力を鍛えることに非常に役立つはずだということでそういったものを教育の中に取り入れていきましょうというようなことで、ここに書いてあるように第 4 産業革命を促進するプログラマー育成と地域活性モデルということで一つ大きなものを出させていただきました。

それからもう一つ、商船学科が中心に、先ほど海という言葉が入ってたので、その辺を受けて当然船員育成が当然主軸なことには間違いのないわけですが、今後の新海洋人材を睨んで、そうではなくてももう少し例えばオフショアの産業ですとか違った海洋開発部門に進めるような学生も少し育てましょうかというのも少し入れて、改革をしていきたいということでこれを一つ出させていただきました。

それから先ほど校長の話にもありましたが、航空宇宙分野です。実は三重県のほうで松阪がクラスターになったりして、その辺をかなり三重県自体が力を入れている部分なんですけど、そういったところで電子機械工学科を中心に実はこういうようなエアロスペースエンジニアの育成を一部目指しましょうということで、これも一応提案させていただきました。この 3 つを 4.0 イニシアティブとして今回出させていただいているところでございます。

さて、こういったいろいろなプログラムを作っても基本この学生の学力を向上させないといけないので、どうしましょうかと実はそういう話になります。

ここからちょっとお恥ずかしい話を少しすることになるのですが、正直なところ、本校は入学生の基礎学力が非常に低いです。数学、物理、英語。どうするか。入学志願者のレベルを上げればいいんじゃないのって単純にそうなるわけですが、どうやって上げるの。単純に入試のラインを上げてでも仕方がないよね。定員確保できなくなるかもしれないし。いろいろな問題が出てくるわけです。ただとどのつまり、どうするかっていうと入学させたあとにどう育てるかが大きなわれわれに課せられた課題なわけです。そういうこともあって、私が教務主事になってから実は基礎学力向上対策ワーキンググループというものを学内に立ち上げてやっていただいたのですが、いかんせん結果はほとんど出ません。出てないのが現状です。お恥ずかしい話です。

それを示す実は結果が先日出まして、1 年生を 4 月に入れた時と半年たった 12 月、1 月に学力がどの程度ついているかっていうのを見る試験があります。これはスタディサポートっていう試験が、外部の試験なのですがやらせます。そうすると 4 月に対して、本来学力が向上していきやいけないはずなのに落ちている。国語も数学も。国語なんてひどいものです。英語はちょっと 1 ランク上がったといえ、どっこいどっこいです。上がったというレベルではないです。実際には S1 から A、B、C、D まであるんですけども、実際に C というのは 4 年制の大学、

上から下まであるんですが挑戦できますかねというような疑問符がつくようなレベルです。

もう一つ大きなショックを受けたのは、4月入った時に1年生は1時間以上勉強していたのに、12月になったらその半分です。家で勉強しているのが。これが大きなショックです。実際何も勉強していない学生の率がぐんと増えています。実際に先日行われた進級会議で出た結果を見ても1年生が結構留年していて、取れていない科目の多くは英語と国語です。これが現実です。本校の場合。

ということで、これを何とかしないといけないということで実は、これ今日多分ここにいられるうちの教職員も初めて見るのかも知れないですけど、これ私のアイデアです。校長にはちょっと相談させていただきました。一つにはきちんと基礎学力をつけるようなチームを組んでやりましょう。それから本校はキャリア教育を1年生から4年生まで実施しています。そういったところで学生が自分はどういう人生を歩むのか。どういった職業に就くためにどういった勉強をしなければならぬかという自覚を付けさせるためにもキャリア教育をきちんとしていかなきゃいけない。それから先ほどのところでも言いましたが、海事人材プロジェクトもそうですが、グローバル化というのもしっかりある程度視野に入れていかないと仕方がないので、これをきちんと推進していくところを設定しないといけないということで、こういったものを新年度から走らせていきたいという具合に考えています。

あとは恐らく10分ぐらいの話なので、あとはちょっと少しいい話を持っていきたいと思いますが、鈴鹿との連携ということで、特に特筆すべきは全国プログラミングテストをやりました。実は本校が主幹なんですが、鈴鹿高専の方に大いにお手伝いいただいて実施させていただきました。それから高専シンポジウム。これは全国の高専から集まるのですが、鈴鹿高専が主幹なのですが、会場は本校を使ってやらせていただきました。ということで、これを両校が一緒にやった非常に成功を納めた非常にいい試みというか、イベントだったという具合に思っております。

それからあとは、学生主事室関係、教務主事室関係、研究主事室関係でそれぞれ、きちんと協力していろいろなことをこなしていただいていたところですね。

あと他機関との連携ですが、まず実はここに来て三重県の教育委員会ときちんと連携を図りましょうと初めてなのですがやらせていただきました。鈴鹿とうちと三重県の教育委員会と実は先日会合を持ちまして、ここに書いてあるような3つのようなところで特に協力をしていきたいと思いますということで合意を経て、今後これが活動していくことになろうかなという具合に思っております。

それからあとは、三重大学が主幹でやっております COC プラス事業。校長の話にありましたが、卒業高等教育機関の地域定着が非常に少ないので、この三重創生ファンタジスタというのを作って地元就職に有利にしましょうということで高等教育機関が 13 あるのですが、そこが一緒になってそれぞれの学校がこういったものを学生に付与しましょうという試みを新年度から始まります。

それからあと、コンソーシアム三重というのを作って、地元を知ってもらって大学、高専、短大を出たら地元就職してよねという活動を中心にやりましょう。ですから先ほどの COC プラス事業が期限が終わったら、多分こちらの方が引き継いでその事業をするんだよと。あと地域貢献もやらせていただきました。

それから国際交流。校長のところにもありましたが、SMA との交流も新たに更新させていただきましたし、MEL キャンプ。それからグローバル SMA から学生が来て、鳥羽丸トレーニングのプログラミングコンテストには本校から SP の学生を招聘して参加してもらいました。ICT プロジェクト。これはうちの学校にきて SP の学生がプログラミングのいろいろな課題に取り組むというもの。それから今 KCC 国際インターンシップカウアイ・コミュニティカレッジハイですが、そちら。今この二つは今現在稼働中です。実際に今実施しているところです。

あと学生の活躍ですが、プロコン。ロボコン。スマートアプリのコンテスト。マイクロソフトエマージングカップ。これは世界大会にうちが出たこともあるのですが、実は 28 年度はこのワールドシーズンシップ部門に最終的に 3 チーム残ったのですが、その 2 チームが本校でした。この他にもう 1 校、東京電機大学が残っていたのですが、3 部門のうちでそれぞれの部門でこのワールドシーズンシップ部門でトップに立ったのがこのサガミーといううちの学生です。3 部門の 1 位の中から 1 部だけ世界大会に出られるのですが、残念ながら選ばれませんでした。ただ日本ではトップということになります。

あとそれから、先ほど言ったカッターの人命救助で表彰されたり、それから地元で地味な貢献をしたりということをやっていますし、このへんの高専向け myRIO コンテストつい最近、先日です。ここダブル受賞で帰ってきました。ということで学生も勉強も去ることながらいろいろなところで活躍しているというのを最後にお見せして私の話とさせていただきます。ありがとうございました。

井 上：ありがとうございました。非常によくまとめていただいて分かりやすかったと思います。資料 1 と 2 に加えて、今のプレゼンテーションを含めて何かご質問、ご意見をたまわれればと思っております。

村 川：基礎学力の話が結構強調されていたような気がしたので、そこでお聞きしたいこととか。なかなか上がってこないということ。それについては改善策をお考えになっているということなのでしょうけど、私も今の職務的には教育関係ではないものでそこら辺に特別に考えがあるというわけではないのですけれど、一般

のニュースなんかでも大学でもそういうような話を結構最近よく聞くような気がするなと思っていましたが、大学入学後結構学力を上げるために高校にまで戻るようなことまでしているところがあるやなしやというような話がニュースで流れているなと思っていました。一方で、逆にお聞きするようなことになるのかも知れませんが、たまたま私との産業支援センターということで、三重県の中小企業の経営者の方といろいろお付き合いしているわけなのですけれど、その中で金沢工大の方に行かせていただいたことがあって、いろいろお話を聞いたことがありまして、バスで行って金沢工大に行くのが目的ではなくて、基本的にはあちらの地域の企業に行くことが主目的だったんですけれど、その中で金沢工大にも寄らせていただいて、金沢工大さんは非常に就職実績が高いということで有名な大学です。私もちらっと聞いていたのですけれど、行くまでそんなにそういう強い印象はなかったんですけれど、行かせていただいたらそれがかなり強調されていたし、指導的にもそういうのがかなり出ているというのがありました。

一つの方向性として、正直言って学力がそれほど高くないというのは認識しているという話から始まって、では学生が就職するためにはどうすれば企業が望んでくれるかということで、どちらかと言うと基本的に実際に実習というか学内にいろいろ学生たちが自由に作れるような設備を大幅に入れて、学生たちが授業でもやりますけれど、授業以外の活動として自分たちが手足なり動かして何かものを作っていきようなことを積極的にやるなりして、学生が自主的にいろんなことをやっているってというようなことをやらせているというかそういう仕組みを作っているという説明でそれが非常にうまくいっているのではないかみたいな。場所も見せていただきましたらたしかに学生さんが授業とは別にそういう場所でいろいろ積極的に活動されているのが見られたなというのがあります。ちょっと説明していただいた話をどう結びつけるかというのはちょっとはつきりと今頭の中で分かっているわけではないのですけれど、何かいろいろ恐らく全国的に学力が足りないことに対していろいろな取り組みをされているのかなと思うのですけれど、金沢工大さんのとりくみは単純に勉強をさせてどうこうというのではないような感じがするなと思ったのですけれど、そこら辺は全国的にどんな動きをしているのかなというか、もし分かれば。大学とこちらでは立場が違うと思うのですけれど。

副校長：今の例えば、出口の就職のところからまずお話しますと例えば今日いろいろプログラミングコンテストなどいろいろお示ししましたが、やはり自分たちが創造性を育む。それから問題を解決する。それから課題を見つけてそれに対して取り組む。実はこういった教育が非常に重要だと。そういったもので培った力が実は就職の方で役に立つし、企業も求めているということで、例えば高専機構も含めて例えばいろいろなコンテストをやったり、作り上げたり、実は高専大学も含めて今い

ろいろなコンテスト、IT 関係が多いですけれども、やっているわけです。だからうちの学生もそういったところに取り組む学生もいますし、カリキュラムの中に自分たちで問題を見つけて解決する、創造性を育むようなカリキュラムは結構入れています。ですからそういったところで、積極的に取り組む子たちは地頭がいいわけじゃないのですが実際のところ就職はいいです。ただ、就職はそれでいいのですけれども、ただ彼らが就職をしていったあとに、やっぱり基礎的な力を問われる部分が出てきますし、それから 1 年生から 5 年生に上がっていく過程で結局そういうことがものづくりだとか好きなだけけれど、やっぱり頭がついていかなくて挫折する子もいるわけです。そうするとせっかくうちの学校に来たくて入ってきたのに、その子たちを拾えていないというのをやっぱり何とかしなくてははいけない。そういった意味で基礎学力は非常に重要である。やはり入社の際にも会社によっては SPI ではないですけれども、そういった試験をくぐり抜けなければいけないと思いますので、それをどうやってその力をつけようかというのは、実は本校の場合は単純に補習をやらせればいいんじゃない。それこそ中学校の力がついてないからこの問題集やりなよっていうぐらいのことしか実はやってないというのが現状なんです。実はそんなのでは全然力がつかなくて、やはり物理的なスペースを設けたりそこに例えば先生が何人かいるとか上級生がいるとかいつでも気軽にわからないところを聞きにいけるとか、もっと仕組みを作って学生を取り込むことをやってあげないと実は彼らはなかなか例えば数学でも英語でも正直なところ「分からない。」「嫌いだ。」とそこから抜けきれないわけです。だからそこを何とか脱出させて一つでも問題が解けたら「楽しいやろ、嬉しいやろ」。英語ちょこっと話せるようになったら「できるじゃん」とそういうようなところを仕組みを作ってやらないと駄目だというような話をさせていただいて、実際に高専で非常に優秀な高専なのにそういったことを地道に取り組んでおられる高専も結構あるんです。ですからそういったことを本校は組織的に小さくて人員、マンパワーとしても厳しいですけれども、そういったところもいいところは取り入れてやっていかなければ駄目かなというので、少し話をさせていただきました。

村 川：そういう他校の仕組み等はだいたい分かっている、マンパワーの問題があるかもしれないというお話でしたけど、方向性が見えてると。それと今の話でプログラミングコンテストみたいなもので自主的にやる素地も一方で結構ある。逆にそのプログラミングコンテストで頑張っているけど、少し基礎学力が不安な子というのは自らの意思でちょっとこれは自分自身まずいなみたいなことの気づきみたいなものはある？

副校長：却ってそういったところで積極的に取り組んでいる子のほうがあります。これはまずい、勉強しなきゃと気づく子の方がそっちのほうが多い。

坂 牧：補足していいですか。小規模だからできるということも多分あるかと思います。基礎学力があるから就職できるということではなくて、就職する視点に立ってどういうふうな環境を作るかというのが大切だと思うのですが、私はこの制御情報工学科の教員であるんですけども、例えば制御情報工学科では実験をやる時にその学年に固執することなく二つ、例えば3年生、4年生合同で実験をするというようなこと。そうすると上級生は下級生から聞かれるので、教えなくちゃいけない。そうすると教えられないと恥ずかしいんだろうなということで、それなりに頑張っている姿があるんです。あと専攻科長がいるところ申し訳ないですが、専攻科ですと工業系の学科と実は海事系の学科、一緒に授業をすることも。そうすると、しかも学年横断します。学年横断して、各学科を横断するという事になると違う視点でいろいろ話をするという事も多分プラスになっているのかなと思います。

あと就職セミナーですけども、就職セミナーは4年生とかあるいは専攻科の1年生が出るだけじゃなくて、インターンシップを考える形を本科でいきますと3年生と4年生と一緒に就職セミナーに出る。違う視点でセミナー出るけど、土俵は同じですよというの、気づかない中で、われわれは当たり前になっていますけれどももしかしたらプラスになっているのかなという気がしております。

井 上：よろしいですか。池田先生。このあたりの送り出す方としてはどうでしょうか。

池 田：もう本当に責任を感じているような。やはり学力の問題というのは中学校でも小学校でもやはり一緒のような問題が起こっています。それを文部科学省の方が、全国学力学習状況調査、4月の第3火曜日に実施をします。やはり三重県は依然と苦しい部分があります。同様に学習時間も全国比に比べて非常に少ないという事実もあります。われわれもものすごく打算的なものの言い方をしますと以前は入試制度自体がどちらかというと学力テスト優先だった時代があります。それに対応するために模擬テストを強制的に全員にさせた。7年間させていました。それから中間テスト、期末テストで各学期2回づつで6回。3年生になると年間13回ぐらい。ここまでの範囲ですよ、ここまでの範囲ですよ、とやらざるをえなかった時代があります。そのいろいろ賛否はあるんですけどもやはり学力テストを重視する状況にいわゆる推薦入試とかというような日頃の努力を見るよりも一発勝負を見るとういか学力というか底力を見る部分を強くしたほうが子供らの学力は一発で上がるようになるとおかしな方策をとらなくても。というのが中学校側の見解で多くの方が持っています。私もある程度それについては賛同します。やはり尻を叩いてどんどんやらせていけば学力はある程度ついてくる。企業だったら求める力というのは、学力があるからその力がないっていうわけではないわけです。言ってみたら。一般論ではないというふうに思います。

本校としては、やはり基礎学力の問題というのは大きな問題で、朝必ず帯の時間、朝の10分間ですが、もう本当にお恥ずかしい話ですが、この頃三重県全体が、いわゆる問一問題。数学の正の負の計算とか英語の一番最初の本当に基礎的な文章の書き換えとかいうようなものを必ず全校でさせて最低限の基礎学力をつけていこうというような部分をやっていますが、伸ばして行かなければならない子を伸ばしていきなさいかないという部分もありますので、そこら辺が非常に苦労しているところです。うちの学校はわりかし人員的には加配教員をちょっと入れていただいているので、英語と数学については習熟度（習熟度別クラス）でやらせていただいている。学力で対応していることとしては、一つは、問題を朝10分間必ずやることと習熟度。はじめはいろいろ意見はありました。低い方のクラスに行くのは恥ずかしいとか親が反対するだとかいろいろあったのですが、意外にそういうことはなく、自分の実力を考えた上で、同時に二人の先生が25人ぐらいの学級を半分ぐらいに割るわけです。それは結構効果がでてきたなというふうに思っています。やはり先ほど言われたようにそういう環境を作ってやらないとなかなか動かないというふうな、中学校でも同じことがあります。ありがとうございました。

副校長：基礎学力というのは大きく言わせてもらいましたが、実は入ってくる学生の中には非常に優秀な学生も結構いるわけです。そういった学生たちの力も伸ばしてやらなきゃいけないので、実はその部分もうちの学校に欠けている部分でそういう仕組みを作ってやらなきゃまずいだろうなど。例えば一つ英語を取ったとしてもレベルは低い中にもぼんぼんと軽く500とかTOEIC取ってくる学生がいるわけです。そうするとそういった学生も同じようにやっていても駄目なんで、君たちはもう自分でどんどん行って。もしくはこの先生に聞いてやって。そういうちょっと伸ばす仕組みを作ってやらないとかわいそうだなという気がして、その辺も実はまたマンパワーの話になるんですけど考えないといけないなと思っているところです。

井上：よろしいですか。私の感じるのは、受け入れたらやはり責任があるのでそこを子どもたちの基礎学力のせいにはできない。でも受け入れたらそれを伸ばさないといけない。伸ばす時にその評価のインデックスを何にするかともものすごく分かりやすいのは学力と一般に言われていることです。私、今日感心したのは副校長の説明された自分のエリアですけどとおっしゃった。いわゆる子どもたちへの教育に対する意識や意欲を作る姿勢とか取り組みとかそういうことをやりたいと3点ほど述べられたかなと思います。私はそれは非常に重要だと思うんです。それも学力の多くの部分を占めるのではないかと。そういう意味では従来われわれが経験している学力向上というものと人間性とか人間の資質を向上させるための仕組みとか取り組み。こういうものもやっぱり車の両輪に必要なんだ

なというふうに感じました。そういう意味ではあまり自分のアイデアっていう範疇に修めないで、校長ともちょっと相談されているそうですから、ぜひともそういう方面で学力向上にも寄与できるような取り組み、仕組みを進められるのをいいのかなというふうに感じました。今第一点の論点として、入学させる。受け入れる。学力を伸ばす。そういう点でいろいろの教育機関も難しいです。難しいけど、私、今日感心したのは感心したというのは口はばったんですけど、石田先生が教育という観点から非常に目覚められたなという。従来そうです。やはり学生の学力を伸ばすといったら、どうしても成績とか点数の問題に執着することになるんですけど、本当の教育というのは石田先生がおっしゃるような部分なのではないかと私は思っています。そういう観点からそこをこれからプロジェクトとしてやりたいというのは、非常に僕は個人的に非常に大賛成です。それは駄目だということはないと思うので、ぜひ新田校長ともタイアップされてそれは進めていかれるのがいいのかなとそう思っています。

校長：ちょっと補足させていただきます。本校だけの問題じゃなく、機構全体のこの分野の学生の支援ということで先ほども副校長が言いましたけど、原級留置率、退学率をいかに下げていくかということは、本校だけの問題だけではなくて全国高専の問題なんです。その中で共通的に出ている課題というのは、入ったあとがいいところと悪いところと裏返しになるんですけど、受験勉強がないという中でほっといたら安易な考えで卒業も就職も非常にいいという中で間で中だるみが出てくると。そこをどうカバーしていくかというのが、非常に課題になっていて、一方で高専のいいところというのは、受験勉強がないから先ほど言いましたようなスキルを磨いてそのスキルの中に自分の創造性を入れ込んでいって、技術者としても人間的にも成長していける時間がある、余裕があるというのはそこら辺の絡みをうまくやらないと駄目なので、そういう中で自覚して自学自習で伸びてくる子をこれからどれだけ増やしていくかと。それから先生方の先ほどもありましたけど、工夫でどうやっていくかということが非常に重要になっていて、全国51高専。公表していないのですけれども原級退学率の非常に少ないトップ10と低いワースト10を比べたら、偏差値とかは調べていないのですけれども、決して学校の偏差値によって差があるのではなくて、入ったあとにどれだけ手立てをしているかでいろいろな工夫で先ほど言ったようなところで差が見えてきているのが今ちょっと分かって、そこら辺が非常に大切だなと。学生の責任にはしないということで、いろいろな工夫を探るといのが今の段階かなと思います。

井上：そうですね。やる気と言ったり、いろいろな言い方があろうかと思いますが目に見えない、数字で表せない部分。それこそ人間力の向上だったりそういう観点からもまた今後さらに邁進されるといいかなという感じました。校長先生ありが

とうございました。他、今日 3 人しかいませんけど論点をちょっと、また違う点で何かご意見ありましたら伺っていきたいんですけど。

村 川：意見というか逆に教えていただきたいのですが、紹介のところで就職状況の話があって、なかなか県内に就職がしてないという。これは別にそういうことがあるというのは一般の中のどこでも知っていることですが、私が今支援センターというところにおいて企業 OB の方がかなりいます。60 代の方なんですけど、結構高専出身の方で企業で頑張ってみえて、その後私どもの方に入っていて企業を指導していただいている方が結構います。北勢地域がどうしても中心になりますので、正直鈴鹿高専出身の方が多いかなという印象があるんですけども、普段お付き合いしている方でも 50 代ぐらいだと高専出身で中堅企業の中心となっている方が結構多いという印象があります。一方で、若い方がこのあたりの中堅企業に入らない状況があるのかなというふうに思っているのですが、高専の側から企業に対してこういうふうにして欲しいというようなことがなにかあるのであれば逆にちょっと教えていただくとありがたいというのがあるんですけど。

副校長：県と言いますか、先ほどの連携でやってます例えば COC プラスの三重大大学ですね。その中でも常にその話が出てくるんですね。あれはもともと趣旨は何かと言うとちょっと話しましたが、県内に 13 の高等教育があってその卒業生がほとんど県外に出ていっちゃう。そういう状況を何とか食い止め、知事も偶然それを謳っているわけです。どうにかして県内に就職してもらう道を探りましょうと。県の魅力というか中小企業も含めて県内に就職してもらうためにはどうするか。発想はそこからきて COC プラス初めているんですが、いろいろやってくると実は県内で中小企業でも高専から全然問題がないんですけども、それがなかなかどういった企業で、どういった職種でどういった人材を求めているのかというのがあまり見えてこない。ということで、実際には学校にくる求人情報だけで生徒が決めていて、その多くはやっぱり県外が多い。うちは特に電子機械も制御情報もそうですけどやっぱりそういった都市圏からくる企業にどうしても学生をとられている。実はだけどよくよく見ると県内にも優秀で非常に魅力のある企業もたくさんあるんだけど、そこは学生には見えてない。先ほどの学生主任が就職セミナーの話をちょっとされましたけど、やはり比率的には県外が多いです。だからもっと県内の企業も積極的にわれわれも積極的に持っていきたいですけど、中小企業の県内の方からも学校にもっともっとアクションをくれれば違うかなと。多分電子機械とか制御情報は地元の学生が多いので、地元でそういった魅力があって、やりがいがあってそこで働けるなら多分行くと思うんです。だからそういったところをもっともっと見えてくれば行くようになると思うんですけども、まだまだその仕組み自体がうまくできていないのかなという気がしますけども。

校長：分かりました。先ほど私もどっちが先かという話をしましたが、鈴鹿と両方を見ていくと就職者数の中の商船はどちらかというとな全国区なんで、そこを除いたとしたら先ほどの県外就職率は工業系、製造系は結構上がってくると思うんです。鈴鹿の場合は県内の3割が。だからここもそういう目で見たら、2、3割は地元に行っているんじゃないかなと思うんです。個人的にはその3割というのは決して低くなくて、それから本社採用とか採用が東京でも地元が鈴鹿なんですとAGFとか本田とかいっぱいあるので、だから地元の定着という意味では、それから愛知県も含めたら三重県と愛知県が違うという話でやられるとまた学生の立場から困るので、全体で考えたら非常に地元の定着率はそれよりいいのではないかなと思うんです。ただ知事はそれでは気に食わないでしょうけど。ただ南部と北部と違うのは、やっぱり南部はやはり北部と比べたらまだ少ないです。製造系で結構これから航空とか力を入れていこうとしているので、そういう面で期待できると思うんですけれど、積極的に職場を作ってもらったらわれわれも指導し易いんじゃないかなと思うんですけど。

坂 牧：実際高専の教員は企業に相当人事に顔をだしていると思います。大学とは全然違うくらい。実際にそのきっかけを作るのはインターンシップで。われわれはインターンシップを受け入れていただく企業様に必ずあいさつをしにいています。実際地元の企業様は回らせていただくと、小さいところだと昔は男子、女子含めて採用したという話がございます。実は地元の企業への就職率を上げるには、女子学生を採用してくださる企業を増やしていただきたいと思います。子どもができた。結婚したということで、昔は採用したんだけど、最近はそれにちょっと戸惑っていると。女子学生については大手に行ってくださいというようなことを実際人事担当者から聞くような話があります。それですので、できたら県としましても女子学生を採用していただくようなところを支援していただくということが地元中小企業の採用数を増やすということなのかなと思います。実際に女子学生は希望しています。

校長：その辺が、私には鳥羽を見てたら弱いと思うのです。商工会議所との連携もここ非常に弱いので地元の企業がまだ地元の商工会議所も分かっていないし、うちもアピールしてるし、鈴鹿の場合ですと、鈴鹿さんが観光交流会で鈴鹿商工会議所等々、結構連携して。

それで光機械（製作所）。先ほど言ったのは、そこは鈴鹿高専の女子学生を雇ったら、女性社長とでもあるのですけれど、ものすごく活躍していて代々、毎年のように女子学生雇ってくれるんです。そういううまい循環ができるとなかなかいいかなと思うのですけれど。

副校長：今学科改造を実は本校考えていまして31年からスタートさせるつもりなのですが、実はそのメインというか特に電子機械工学科、制御情報工学科を変えようと思っ

ているのですけれど、実は地元志向の学科を目指している。要するに地元を活性化させる。もしくは地元の魅力を発信するような人材を地元にどんどんどん送り出していくというのが趣旨の一つにあるので、実はそういったところで商工会議所なり地元企業とどんどん連携を取っていこうと思っておりますし、今後それを作っていかなきゃなんないと思っていますけど、もとを正せば本校の場合、商船学科しかなかったものですからそういった仕組みを作る必要がなかったのです。それが工業系ができていったけれども、ただそこにじゃあやりましょうということが何かのきっかけが多分なくてきちやったんだと思います。だから今度のこの新学科設置を考えていますから、それを起点にもしくはそういったことを考えていけないといけないかなと実は内々は思っているんです。

井 上：さっきの村川委員のお話は鳥羽商船高専のアイデンティティーどのように確立するかってことに波及してくるんです。今石田先生がおっしゃったように当初そもそもが船員養成のためにこの学校が 130 年前に作られた。ところがその後の変化に応じて工学系になり、工業高専系の商船高専になっていったと。だからジレンマを抱きながら教育をされているのではないかと常々思っているのです。ついこの前、ひところまではさっきの新田校長の絵にもあったように富山と鳥羽と瀬戸内に 3 つ固まっているんです。商船高専が。これを 1 校にしろという動きもあったんです。ところが、はっきり言って政治力で 5 高専あるんだから、1 高専ごとに 1 商船学科を 5 つ存続させるという方向に決まったように聞きます。そうなるのとそれをどのように捉えるかというのが僕は非常に重要な課題だと思うんです。ただ 3 学科のうちの 1 学科が商船高専として残ったというふうに考えると進展がないのではないかと思います。この 5 つに商船学科が残されたということは今後どのようにそれを使っていくかということも重要な課題ですが、特に鳥羽商船高専という私の関わりからいうと全国区の商船社会とか海事社会というどのように貢献するのかというアイデンティティーをもう少し明確にしないといけないのではないのか。それが冒頭の説明にあったように中学生たちが学校選びをする時に、就職のことを考えて選んでいるようだというご発言もありました。そうすると鳥羽商船高専を選んでいただけるかどうかは鳥羽商船高専のどういう教育を受けると社会的にどんな仕事に付けるのかというのがまだ不明確なのではないのかなと思うのです。そういう学校のアイデンティティーの明確さというのは、商船学科があつてこそその鳥羽商船だというふうに考えるとすれば、これからよって立つところだったり、これから進んでいくべきものとかそういうものがもっと明確になるのではないかと思いますし、しいては、これも校長の説明にあったように商船高専の就職率みたいなものが、いわゆる海事社会とどう関係するのかということも踏まえて関係性を考えて模索していかないと鳥羽商船高専の今後の特に商船学科の在り方、ここがどっちつかずではもう僕はいけない時代になったと思うんで

す。そのまま元に戻るのか、それとも新しい方向性を持って何か新規開拓をしていくのか。その辺のことも踏まえた上で、学校内で特に商船学科の将来構想というものをもう一度練り直されるといいのではないかなと思いました。

特に海上就職率を持って商船学科が要るの要らないのという議論のとぼっちりを受けて結構右往左往しましたけれど、商船高専の場合は二の舞は踏まずに、われわれはこうするんだと。何のためにこうするのか。社会的にこうつながるからこうするんだという自負心と自立心を持って引っ張っていただきたいなと思います。特に私は130年の歴史を持つ鳥羽商船高専の応援団でもありますので、ぜひとも他の横並びではなくて、ぜひとも新しい方向性を鳥羽独自のものを考えていただきたいなと思うところです。これについてはすぐにこうする、ああするっていうのなかなかできないのですが、社会的に鳥羽商船高専への社会ニーズって何なのかというところのあたりからももう少し明確にしないと船会社が海上就職率のターゲットであるならば、船会社がどう考えているのかとか、ものすごく大きな社会問題でもありますので、あまり校内だけのことに関わらず社会全体を見渡しながら考えていただければと思っております。

もうあと一点ぐらい何か論点がありましたら提示していただければ議論ができるかもしれませんが。運営諮問会議としてはああせえ、こうせえとはなかなか具体的な立場でもありませんので、こういう件について内部的にお考えいただきたいという遠回しのサジェスションしかできていないのかもしれませんが、私は今の段階に立ち至れば、鳥羽商船高専がもう猶予がないと思っています。その意味では新田校長先生にはもう少し長くいてもらいたかった。戻るとおっしゃるのでちょっと寂しいのですけれども、新田先生も随分お悩みになって商船高専をどういうふうに持っていくべきかとか、鈴鹿工業高専の先行きもありますでしょうし、いろいろお考えになられている様子は伺っていてなかなか進取の気性をお持ちの校長先生だと思って見させていただいていたのですが、お戻りになられてもぜひ鳥羽のように頑張っていたきたいと。私としては明確にこうだと言える立場にないので、あまり遠回し的なことしか言えていませんけれども、鳥羽商船高専を取り巻く方々はものすごくよく考えておられます。私もこういう立場にあって、いろいろな人からいろいろな話を聞かせてもらうのですけれども、母校の先輩という立場からも今ある様子についても非常に危惧されている方々もおられますし、今後あるべき方向性についてご意見をお持ちの方もおられるので、そういう方々も力添えをとりいれていくようなことをされたらいいのかなと思ったりしています。特に同窓会というのは非常に力があります。ここの方々はよく考えておられます。それで関西は特に鳥羽商船出身の一旗揚げた方々がたくさんおられます。そういう方々からもいろいろな意見を聞かせていただいているああそうですかと知らぬふりをして聞くんです。だけどよく見ておられるなという感じるところが

大きいです。ぜひそういう方々ともうまく連携を取っていただくといいかなと思いました。よろしいでしょうか。

池 田：ありがとうございます。

私 37 年中学校で教員をしているのですが、37 年間の中で先ほども言いましたように鳥羽商船さんの時代の流れの変遷とともに進路指導もし、女子学生が電子機械工学科の中に入るといふようなところの姿も見ております。ただだんだんそのときに比べて非常に入学説明会ときの先生方の説明が魅力的になってきています。以前と比べて親切といふか非常に魅力的な説明をしていただいている、先生が私は長いこと一緒にして知っているんですけども、非常にユーモアたっぷりで、そういうようなものを感じさせるようなそういう説明をしていただいているので、非常に私どもも話を聞くのが非常に楽しみなのです。ぜひとも今後ともその形を続けていただく。それがまた意欲のある子どもたちの入学にもつながっていくと思いますし、一人は一家を支えていかなければいけないので、全体的にちよっときつい子どもがいたんですが、その時にさとうむねお先生という先生がみえたのですが、その先生が、「機械科に入ったら、一国一城の主になれるよ」といふようなその説明をしていただいたというところ。むしろ子どもより周りの担任の方が感激をしてぜひとも親に勧めたということもありました。やはりそういうような地道な努力だと思うんですけど、ぜひともそのような形を続けていただくことかなというふうに思います。私は、鳥羽東に来る前は答志中学校やったのですが、そのときには文化祭の体験講座できていただきました。江崎先生の講座の若手の教員の方やったんですが、やはり子どもたちが学生さんを見る目が非常に違うという部分がありましたので、ぜひともそういう外への PR というのを今後も非常に魅力のある PR を今後も続けていただくようにぜひともお願いしたいと思います。ありがとうございます。

井 上：それではだいたいいい時間に近づいてきましたので、今日は入口論から出口論に至るまで大変 3 名だからというわけではありませんけれども、出席者のおかげを持って充実した議論になったかなと思います。今後もまたわれわれ微力ですがご支援できる場所はしたいと思っておりますので何なりとお申し付けいただければと思っています。それでは今日はおふた方の委員の方々にご参加いただきましてありがとうございます。一応これで閉じさせていただきたいと思っておりますので事務方にお返しいたします。

司 会：失礼いたします。閉会にあたりまして、本校の新田校長からごあいさつを申し上げます。お願いいたします。

校 長：本当に委員の皆様方には貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。また井上先生には今後の我が高専の在り方、また機構全体の課題についても指摘

いただきましたので、非常に私としてもその点肝に銘じていろいろ考えたいと思っております。

議論の中で特に一番大きな課題は先ほど井上先生がおっしゃられた今後の商船高専のあり方。特に工業系との連携について、いかに協力をうまくやっていくかと。それから地域です。特に工業系となると鳥羽商船が生きていくのは地域に目をうつさないどうしても駄目ですし、それから商船系になりますとこれ、日本から世界全部を見ると。そういう中でのうまい解決というのはないんですけれども、在り方を私どもとしても探っていきたいなと思っております。

その一つはやはり教育のベースが共通のところがあると思いますので、15歳から入ってきますから若い年代にその辺をきっちり連携させていくような教育システムを作って出口ではいろいろな分野に分かれていくような人材育成をうまくやれないかなとか、大雑把ですけどもそんな課題が見えてきたと思っております。

あとは基礎学力。学生が勉強しないとどうしようもないので、その辺われわれ教職員一同非常に努力して頑張っていきたいと思っております。私もこれで校長おりますけれど、次の校長にも引き継ぎをきっちりいたしまして、先生方には引き続き諮問委員の立場で貴重なご助言をいただきますようよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

司 会：失礼いたします。以上をもちまして平成28年度運営諮問会議を終了させていただきます。外部委員の先生方、また井上先生にはスムーズなご進行どうもありがとうございました。本日はどうもありがとうございました。

独立行政法人 国立高等専門学校機構

鳥羽商船高等専門学校の紹介

2017(H29)年3月16日

高等専門学校 高専 KOLEN

全国57校

国立51校

(55キャンパス)

商船学科のある高専

5校だけ





独立行政法人国立高等専門学校機構

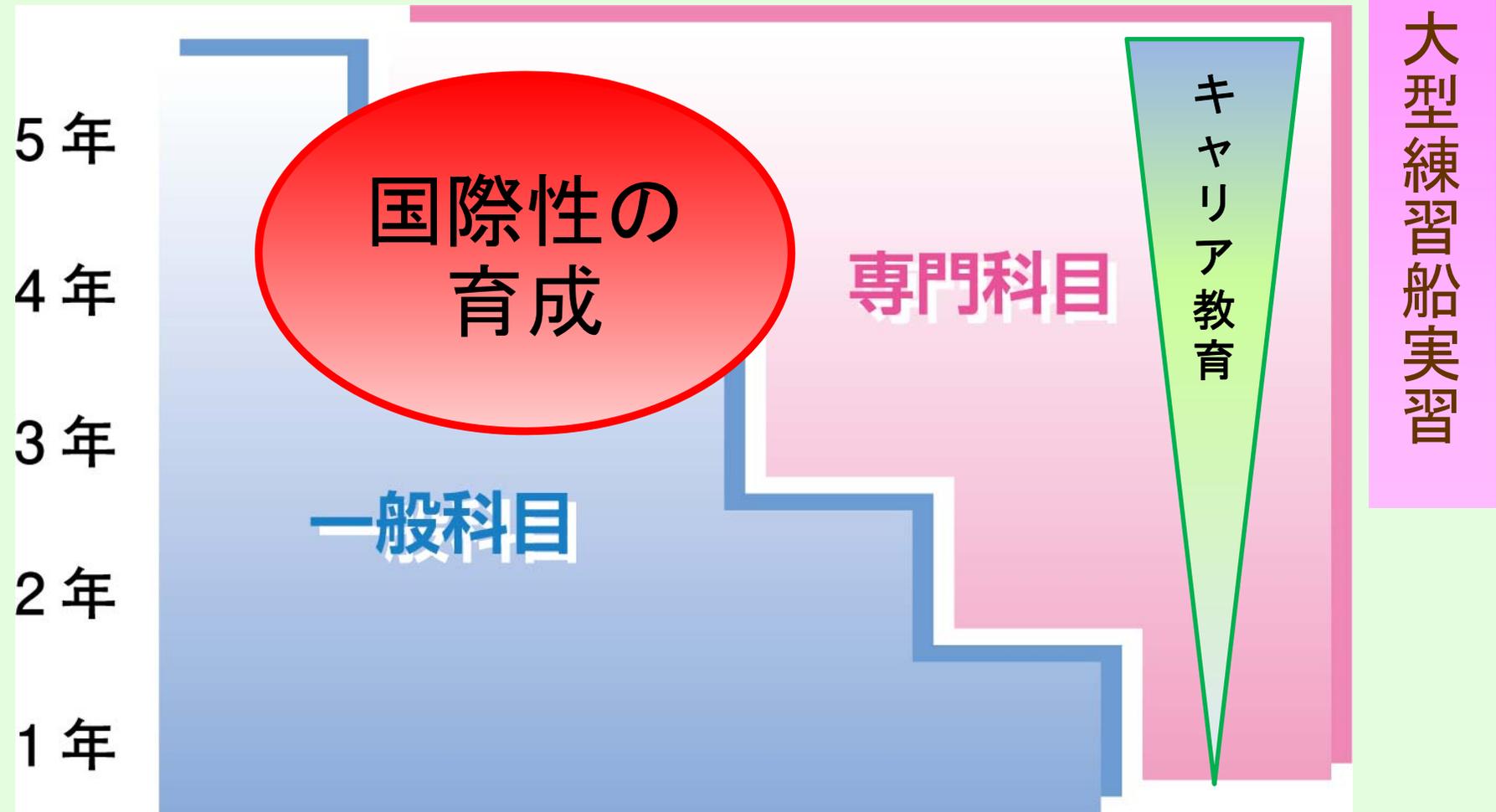
鳥羽商船高等専門学校

National Institute of Technology, Toba College



高専教育システムの最大の特徴

6年



くさび形教育 5年(商船は5年半)一体型の技術者育成

本校のセールスポイント

伝 統

- 創設以来130年以上の伝統を持つ
- 同窓会活動が充実しており、卒業しても強い味方

立地条件

- 交通の便が良い
- 周辺に名所が多い
 - ✓ 伊勢神宮、鳥羽水族館、ミキモト真珠島、熊野古道など

進 路

- 工業高専に比べて入学しやすいが、進学・就職先は同じ！

明治(1881年～1911年)

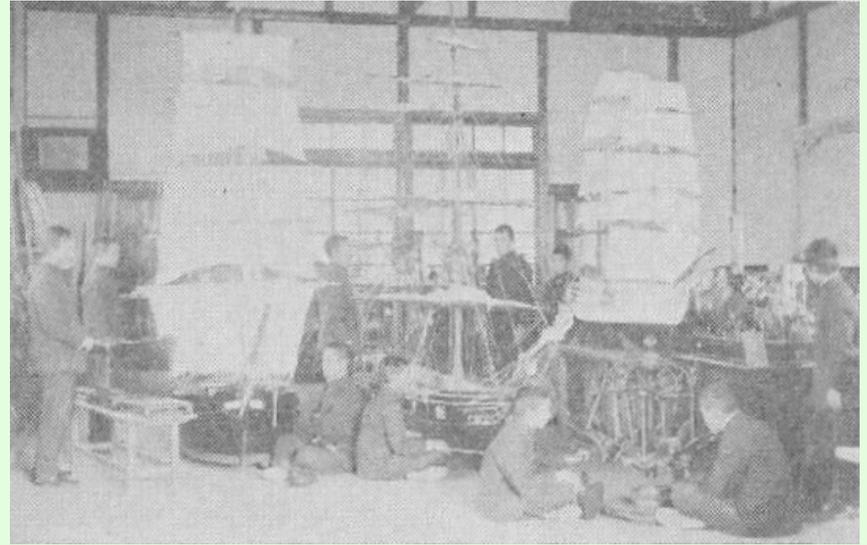
- 明治14年(1881)** 東京攻玉社分校として**鳥羽商船黌**開校する。
(8月20日)
- 明治26年(1893) 経営困難になり鳥羽商船黌廃校となる。
- 明治28年(1895) **私立東海商船学校**に改称して再興する。
- 明治32年(1899) **鳥羽町立鳥羽商船学校**となる。
機関科が設置される。
- 明治43年(1910) 現在地に新校舎竣工。
- 明治44年(1911) **三重県立鳥羽商船学校**設立。



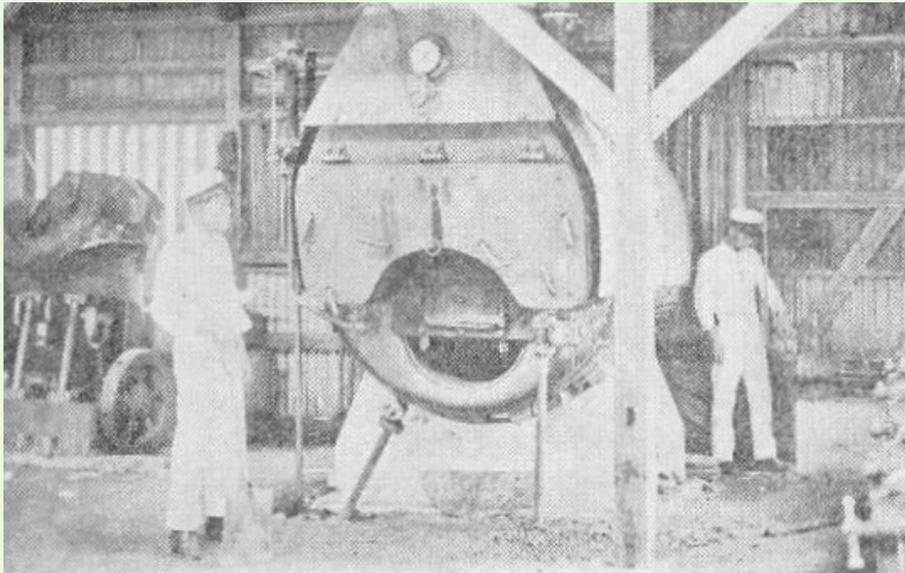
係留練習船「天城」の船上で



県立時代の校舎正面



標本室



機関科技業



県立時代の校舎全景

昭和(1)初期

昭和 5年(1930)

地方公立商船学校のための大型練習
帆船「**日本丸**」竣工。

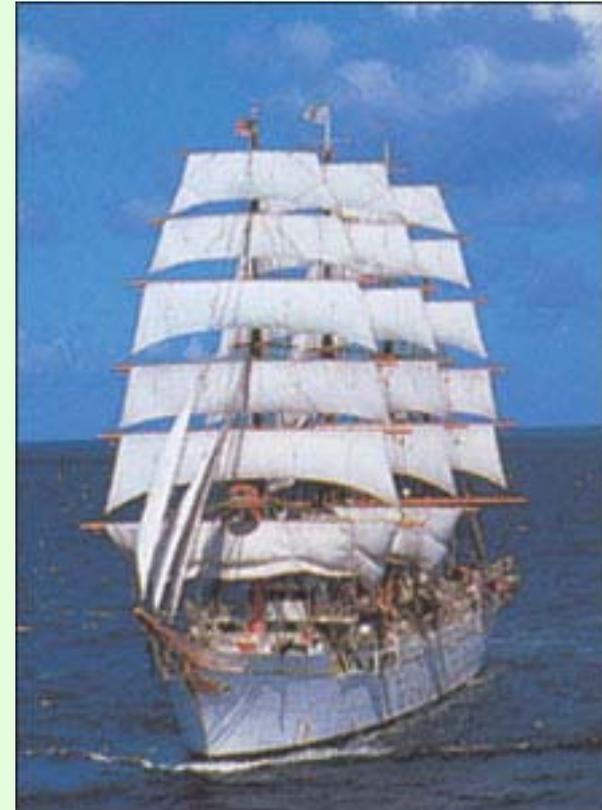
大型練習帆船「**海王丸**」竣工(航海練習所所属)。

大型練習帆船を文部省航海練習所所属とし、地方公立商船学校生徒の練習船とする。

全国商船学校11校が文部省の認定を受ける(十一会)。



旧日本丸



旧海王丸

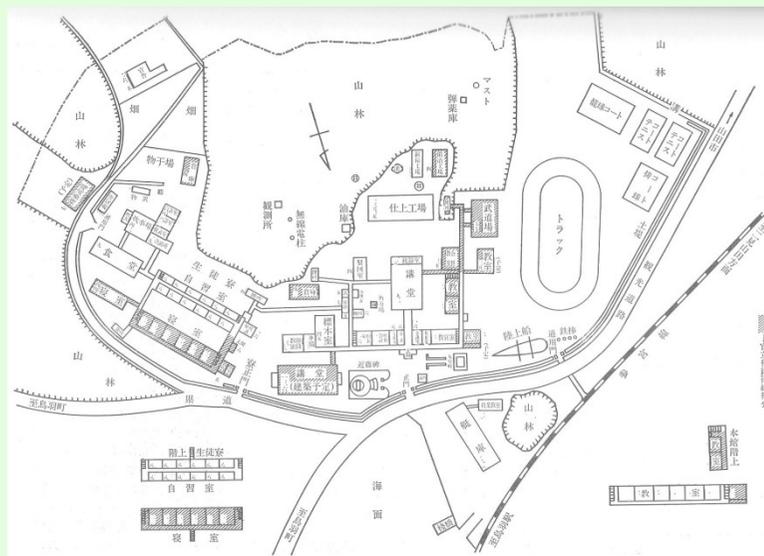
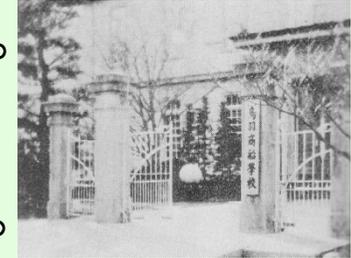
昭和(2)戦前

昭和14年(1939) **文部省直轄の官立鳥羽商船学校**となる。

昭和17年(1942) **逓信省所管**となる。
航海練習所、文部省から逓信省に移管。

昭和18年(1943) 逓信省は**運輸通信省**となり、商船学校の所管名が変わる。

昭和20年(1945) 運輸通信省は**運輸省**となり、商船学校の所管名も運輸省となる。



昭和17年当時の平面図

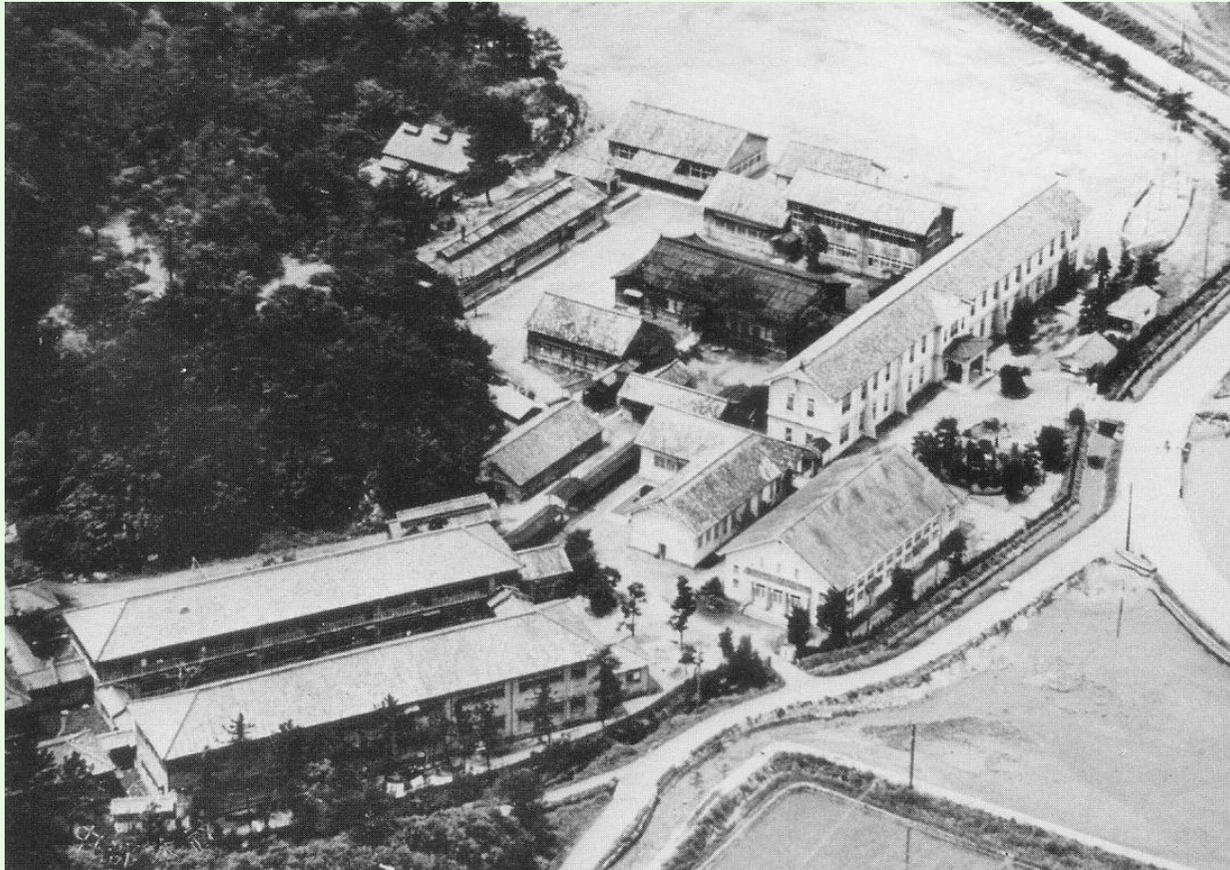


昭和18年度の陸上鍛錬大会の様子

昭和(3)戦後

昭和26年(1951) 鳥羽、富山、大島、広島、弓削の5商船学校は**国立商船高等学校**として**文部省**に移管。

昭和42年(1967) **鳥羽商船高等専門学校**開校式挙行。



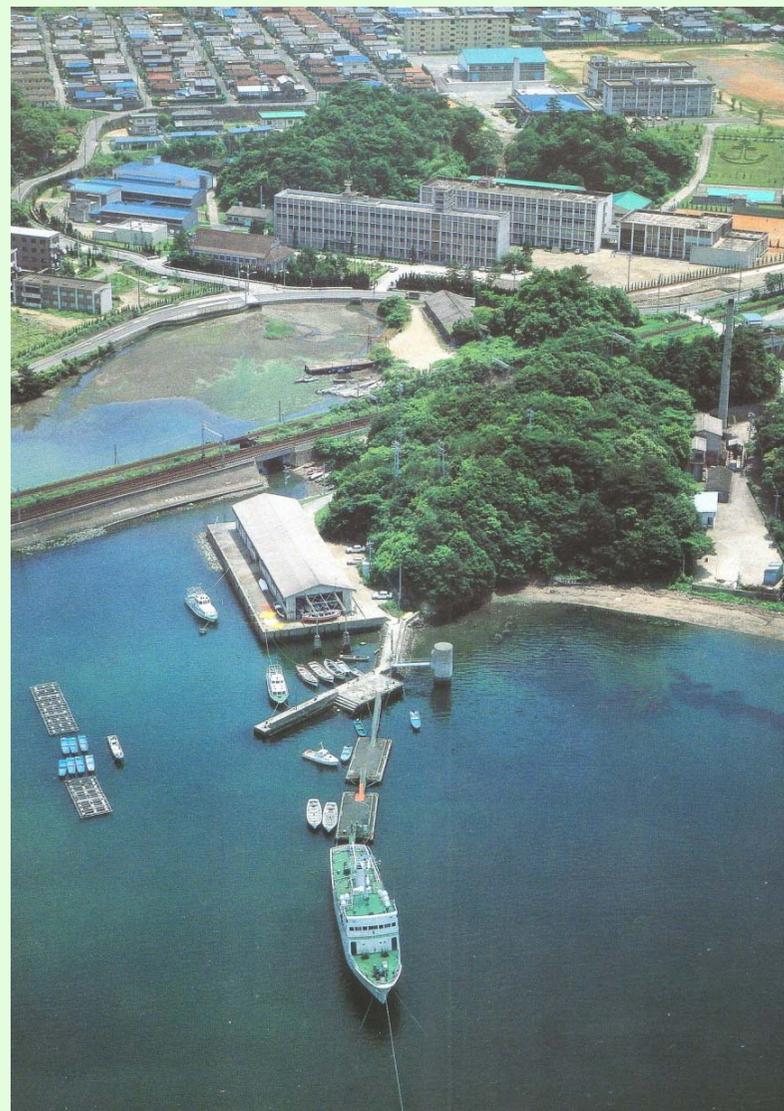
高校移管直前の本校全景

昭和(4)高度成長期

昭和56年(1981) 創基100周年記念式典
挙行。

昭和60年(1985) 改組により**電子機械工
学科**設置。

昭和63年(1988) 改組により**制御情報工
学科**設置。これにより、
3学科体制となる。



100周年当時の本校

平成(現在)

平成13年(2001)

創基120周年記念式典挙行。

平成16年(2004)

独立行政法人国立高等専門学校機構鳥羽商船高等
専門学校となる。

平成17年(2005)

専攻科設置(海洋システム学専攻、生産システム工学
専攻)。



鳥羽丸Ⅲ



あさまⅢ

教育理念・教育目標

□教育理念

進取・礼讓・質実剛健

□教育目標

1. 人間性豊かな教養人となること
2. 創造豊かな技術者となること
3. 国際性豊かな社会人となること

本校の規模 (2016.4.1現在)

教育職員					事務職員等			合計
校長	教授	准教授	講師	助教	部課長	係長等	一般職員等	95
1	24	18	0	9	3	16	24	
52					43			

学生数(2016.4.1現在)

本科

学科名等		定員	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	実習課程	計
商船学科	航海コース	40	47(7)	37(7)	17(1)	15(1)	21(0)	19(1)	240(24)
	機関コース				24(3)	25(1)	18(2)	17(1)	
電子機械工学科		40	49(6)	34(2)	46(2)	42(0)	43(1)		214(29)
制御情報工学科		40	46(14)	40(8)	42(10)	41(9)	42(7)		211(48)
計		120	142(27)	111(17)	129(16)	123(11)	124(10)	36(2)	665(101)

専攻科

専攻科名等	定員	第1学年	第2学年	計
海事システム学専攻	4	3(1)	2(1)	5(2)
生産システム工学専攻	8	8(1)	10(3)	18(4)
計	12	11(2)	12(4)	23(6)

()は女子学生数内訳

入寮状況

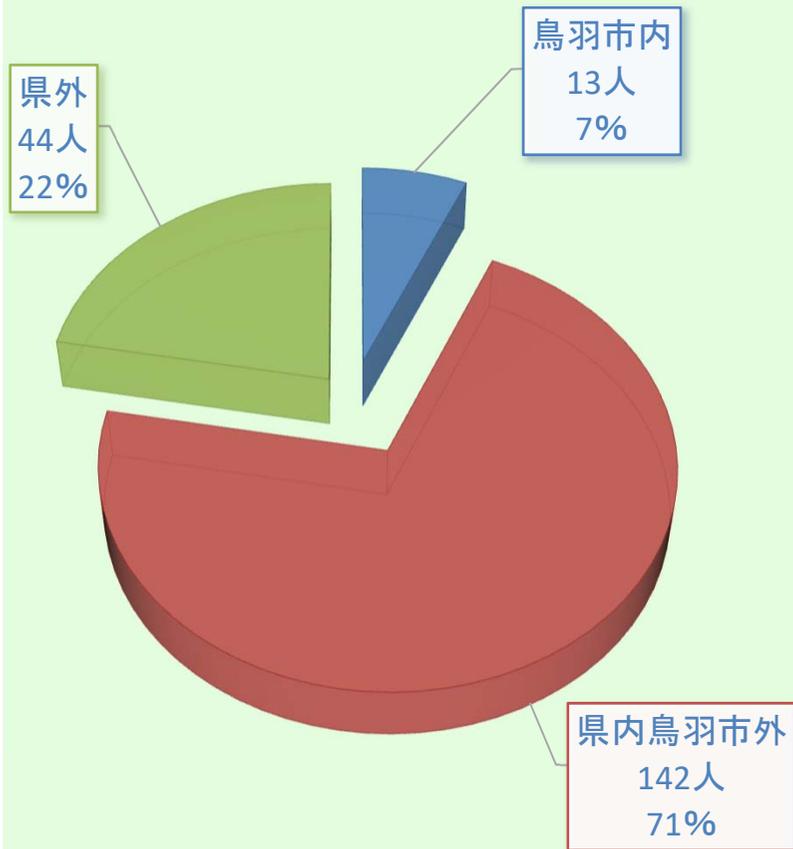
平成28年4月1日現在

寮生		通学者	計
	うち留学生		
196名	4名 ラオス 1名 モンゴル 1名 インドネシア 2名	433名	629名

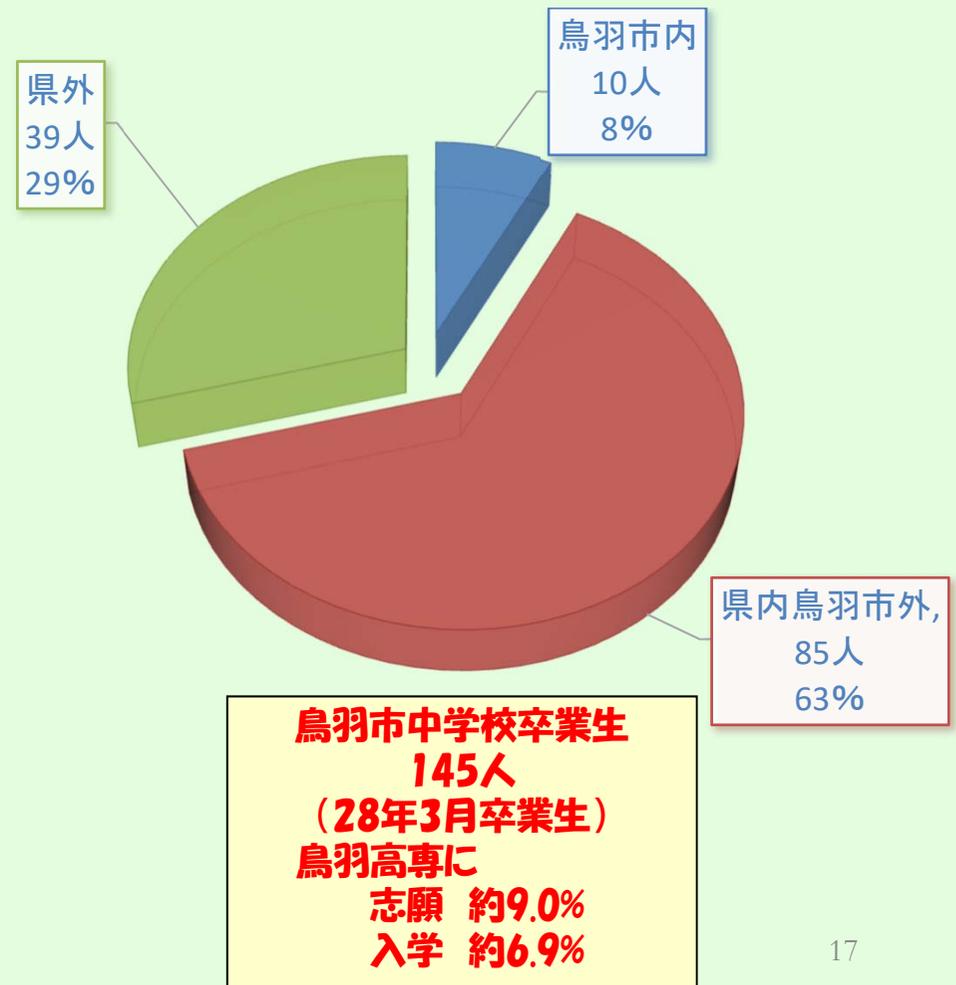


地域と学生の受入

①28年度志願者(199名)

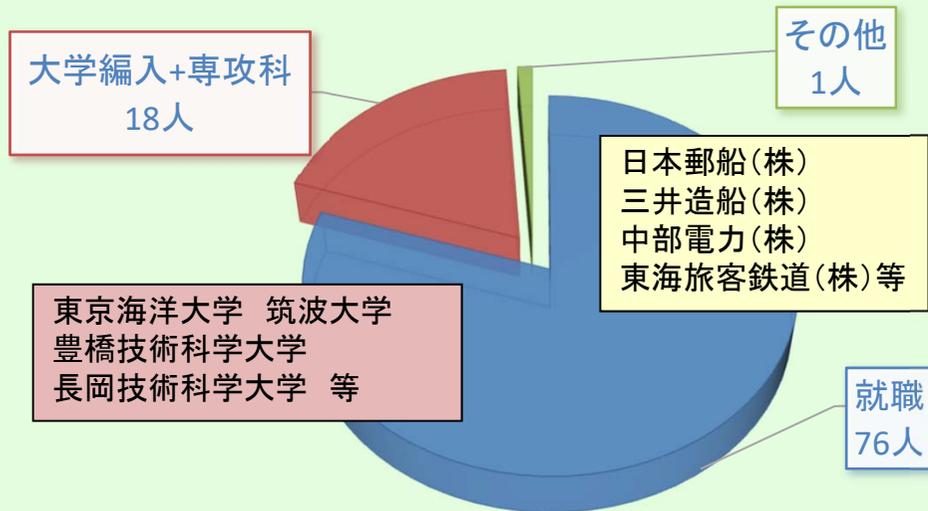


②28年度入学者(134名)

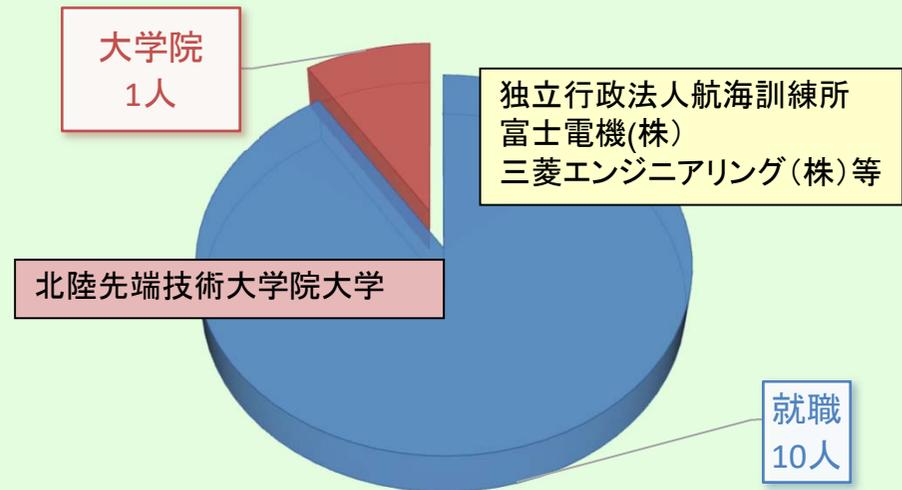


卒業後の進路

(1)平成27年度卒業生 学科生 95名



専攻科生 11名



(2)学科の進学率・就職率・求人倍率

年度(%)	27	26	25	24	23
進学率	19	20	25	27	23
就職率	80	79	74	71	75
求人倍率	15	15	16	14	16

専攻科

年度(%)	27	26	25	24	23
進学率	9	8	22	27	6
就職率	91	92	67	73	89
求人倍率	44	30	63	29	18

学生の就職状況

平成27年度

	就職者数	県内 就職者数	県外 就職者数	県内 就職率
学科	73	4	69	5.5%
専攻科	10	0	10	0%

平成26年度

	就職者数	県内 就職者数	県外 就職者数	県内 就職率
学科	77	12	65	15.6%
専攻科	12	1	11	8.3%

平成25年度

	就職者数	県内 就職者数	県外 就職者数	県内 就職率
学科	70	9	61	12.9%
専攻科	6	1	5	16.7%

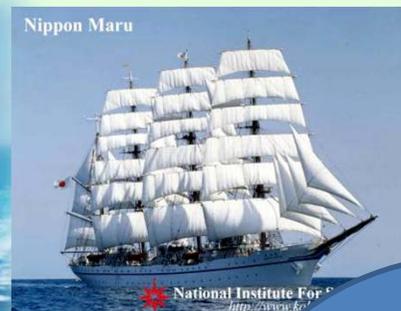
商船学科

海のように大きなスペシャリストになる

- 航海コース：船長、航海士をめざします
- 機関コース：機関長、機関士をめざします

第3学年でコースが分かります

海の上のプロフェッショナル



1年間の
大型練習
船実習が
あります

電子機械工学科

好きなことを追求し、夢に向かって進む

機械工学と電気・電子工学の両方の専門知識を武器に活躍する

ロボットを動かす



制御情報工学科

先端技術を学び、未知の領域に挑戦する

情報処理と自動制御技術を武器に活躍する



電気製品に頭脳を

専攻科

海事システム学専攻

- ・ 商船学科などから進学

生産システム工学専攻

- ・ 電子機械工学科・制御情報工学科
などから進学

本科の上に専攻科が設置されています

高度な専門的学術を学んで、国際的感覚と広い視野を持った実践的専門技術者をめざします

2年間の少人数教育

「学士」の学位が取得可能



進路状況（平成27年度卒業生）

区分 学科	卒業者数	内 訳			求人数	求人 倍率
		就職	進学	その他		
商船学科 (航海コース)	20 (5)	13 (3)	4 (1)	3 (1)	90	6.9
商船学科 (機関コース)	14 (2)	13 (1)	0	1 (1)	332	25.5
電子機械工学科	24 (0)	19 (0)	5	0	372	19.6
制御情報工学科	37 (13)	28 (9)	9 (4)	0	373	13.3
合 計	95 (20)	73 (13)	18 (5)	4 (2)	1167	16.0

主な進学先: 東京海洋大, 筑波大, 豊橋技科大, 長岡技科大, 専攻科など

16倍!

() は女子で内数

卒業生の進路(平成27年度)

区分 Division	学 科 Department	商船学科 Maritime Technology Department	電子機械工学科 Electronic Mechanical Engineering Department	制御情報工学科 Information And Control Engineering Department	海事システム 学専攻 Maritime System Major	生産システム 工学専攻 Production System Engineering Major	計 Total	
	進学 Entrance	大学編入学・高専専攻科・大学院 Transfer to specialized course in college or to University	4	5	9		1	19
就職 Employment	公務員 Office Holder				1		1	
	運輸・通信業 Transportation Communication Industry	海上 Marine	14					14
		陸上 Land	6	1	2			9
	情報通信業 Information Communication			5		3	8	
	一般機械製造業 General Instruments Industry		5	3		2	10	
	電気・情報通信機械製造業 Electric Instruments Industry			1			1	
	輸送用機器製造業 Transportation Facilities Industry	3	1	4		1	9	
	その他製造業 Other Manufacturing Industry		3	3			6	
	電気・ガス・水道業 Electricity, Gas, Water Service Industry		1	2			3	
	サービス業 Service Industry	3	8	8	1	3	23	
	上記以外 None of the above						0	
その他 Others		4					4	
計 Total		34	24	37	2	10	107	

※ 就職の分類は、総務省日本標準産業分類に基づく。

練習船

● 鳥羽丸 Toba Maru

船 型 Type	長船首楼甲板型 Long Forecastle Decker
船 種 Vessel Kind	汽船第4種船 No.4 Steam Ship
航 行 区 域 Plying Limit	近海 Greater Coastal Area
主 要 寸 法 Principal Particulars	全長 Length 40.00m、幅 Breadth 8.00m、深さ Depth 3.30m
総 ト ン 数 Gross Tonnage	244.00トン
主 機 関 Main Engine Type	4サイクルディーゼル 1300PS×370RPM 1基 Four Cycle Diesel Engine
最 大 速 力 Maximum Speed	13.80 ノット Knots
航 続 距 離 Endurance	2300 海里 NM
定 員 Capacity	乗組員 Officers & Crew 9名(職員4名・部員5名) 教 員 Instructors 3名 学 生 Students 44名 計 Total 56名
竣 工 年 月 日 Date Built	平成6年8月19日 Aug.19,1994



● あさま Asama

船 種 Vessel Kind	汽船(F.R.P) Steam Ship (F.R.P)
総 ト ン 数 Gross Tonnage	14トン
主 機 関 Main Engine Type	ボルボペンタ 331kw (450PS)×2 VOLVO PENTA
竣 工 年 月 日 Date built	平成16年3月30日 Mar.30,2004



国際人をめざして(国際交流)



2016年9月にSingapore Polytechnic(SP)のSingapore Maritime Academy(SMA)と3回目の国際交流協定更新



SPの語学研修(英語キャンプ)に参加



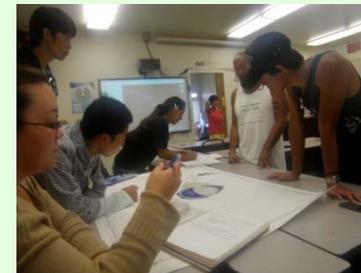
SMAの学生と一緒に豪華客船Superstar Virgoで体験航海(MEL)



MEL CAMPでの晩餐の後



2014年3月にトルコ共和国のイスタンブール工科大学(Istanbul Technical University; ITU)と国際交流協定締結



ハワイのカウアイ島・ハワイ島で行われる国際インターンシップIkena Kahua 2012

全国高専プログラミングコンテストにて 最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞

2016年10月

◆自由部門

「みつばちず」が最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞

◆企業賞

東芝ITソリューション企業賞:「みつばちず」

トヨタコミュニケーションシステム企業賞:「HOME LOG」



「みつばちず」

ドローンを用いた防災減殺地図作成システム

「HOME LOG」

洗面台にスマートフォンを設置し、家族とのコミュニケーション、健康管理ができるシステム

東海北陸地区ロボットコンテスト

アイデア賞 受賞

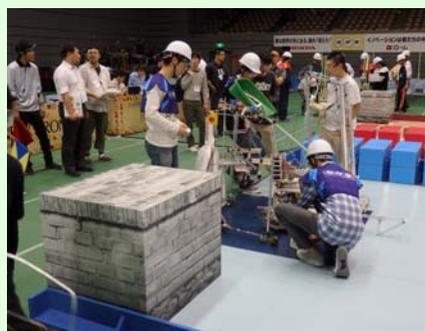
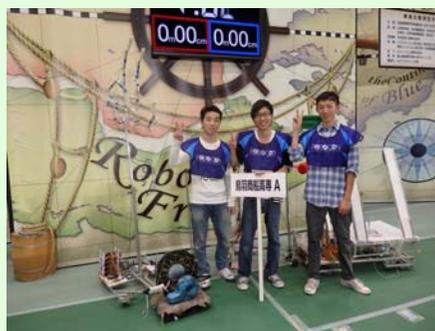
特別賞(本田技研工業株式会社) 受賞

全国高専ロボットコンテスト 出場

2016年11月

◆東海北陸地区 アイデア賞、特別賞(本田技研工業株式会社)を受賞

◆全国高専ロボットコンテスト 出場



2016年度主な受賞

□第27回全国高等専門学校プログラミングコンテスト

自由部門最優秀賞、文部科学大臣賞

□高専ロボコン2016

東海北陸地区 アイデア賞、特別賞

□第5回気象文化大賞 高校・高専「気象観測機器コンテスト」

最優秀賞、優秀賞

□Hack U 2016 名古屋会場

優秀賞

□第10回東海北陸地区高等専門学校スピーチコンテスト

3位入賞

他高専との連携

鈴鹿高専との連携

□時期

2009年度～

□取組内容

①教務関連

- ・PR活動
- ・入試関係(会場、方法)

②学生生活関連

- ・高専祭での協力
- ・学生会・クラブ活動の交流支援

③寮務関連

- ・寮生・寮役員の交流

④研究関連

- ・共同研究
- ・施設・設備の共同利用

⑤事務関連

- ・教員・職員の人事交流
- ・物品の共同購入
- ・事務業務についての情報交換

第三ブロック校長会の発足

・全国5ブロック

□参加校(11高専)

(東海)岐阜、豊田、鳥羽、鈴鹿

(北陸)富山、石川、福井

(近畿)舞鶴、明石、奈良、和歌山

□活動内容

①教育・国際交流

②研究

③人事・管理運営

ご静聴ありがとうございました。

(日本丸出航 2015年12月12日)



平成28年度 学生の活躍記事(新聞)

No.	日付	記事タイトル	対象学生	備考
1	28. 12. 15	鳥羽商船高専に最優秀 「水やり頻度把握アプリ開発」	制御情報工学科	読売新聞
2	28. 12. 13	気象観測アプリで最優秀賞 「高校・高専機器コン 鳥羽商船4人のチーム」	制御情報工学科	伊勢新聞
3	28. 11. 8	鳥羽商船高専が最優秀 (プログラミングコンテスト)	制御情報工学科	朝日新聞
4	28. 10. 29	プログラム 改良に意欲 「全国最優秀の鳥羽商船生」	制御情報工学科	中日新聞
5	28. 10. 21	自転車はツーロックで 「鳥羽署と商船が防犯啓発」	本校パトロール隊	伊勢新聞
6	28. 10. 16	ロボコンで全国へ 鳥羽商船「アイデアで魅了する」	電子機械工学科	中日新聞
7	28. 10. 10	全国高専プログラムコン閉幕 「災害用ドローンアプリ」	制御情報工学科	伊勢新聞
8	28. 10. 9	高専生、プログラミング競う 「170チーム参加 伊勢で全国大会開幕」	制御情報工学科	伊勢新聞
9	28. 9. 16	操船学習「楽しい」 「鳥羽商船 シンガポール学生研修」	商船学科	中日新聞
10	28. 9. 14	シンガポールの学生研修への期待を語る 「18日まで鳥羽商船で」	商船学科	読売新聞
11	28. 8. 30	3D-CADで製作 「鳥羽商船で中学生ら」	電子機械工学科	伊勢新聞
12	28. 8. 26	2選手健闘誓う 「鳥羽商船剣道部が全国大会へ」	剣道部	伊勢新聞
13	28. 8. 24	発電機工作ときめく 「鳥羽商船高専 講座に中学生7人」	商船学科	中日新聞
14	28. 8. 20	鳥羽商船生は命の恩人 「海難事故救助で表彰」	カッター部	中日新聞
15	28. 8. 17	伊勢日赤と鳥羽商船、愛知県立大 「位置情報アプリ共同開発」	制御情報工学科	伊勢新聞
16	28. 8. 6	防災対策でドローン試験飛行 「鳥羽商船と東大淀まちづくり協議会」	制御情報工学科	伊勢新聞
17	28. 7. 31	鳥羽商船カッター部に感謝状を贈呈 「鳥羽海保、海難救助で」	カッター部	伊勢新聞
18	28. 7. 10	少林寺拳法「堂々と」 「インターハイ出場 鳥羽商船の部員」	少林寺拳法部	中日新聞
19	28. 6. 27	水上バイクの3人を救助	カッター部	伊勢新聞

平成28年度 学生の活躍記事(本校HP)

No.	日付	記事タイトル	対象学生	備考
1	29. 1. 13	楽天IT学校甲子園・決勝進出	制御情報工学科	
2	28. 12. 18	HacK U 2016 大阪会場 優秀賞2件受賞!	制御情報工学科	
3	28. 11. 19	第5回 気象文化大賞「高校・高専 気象観測機器コンテスト」最優秀賞・優秀賞 受賞	制御情報工学科	
4	28. 11. 12	東海北陸地区高等専門学校英語スピーチコンテストで3位入賞	商船学科	
5	28. 10. 8~9	高専プロコン 主管校で最優秀賞獲得	「みつばちず」	
6	28. 10. 9	高専ロボコン アイデア賞&特別賞のダブル受賞 全国大会出場	ロボコン同好会チーム	
7	28. 9. 26	平成28年度 三重県献血功労者表彰で金色有功章を受章		
8	28. 9. 25	HacK U 2016 名古屋会場 優秀賞受賞	制御情報工学科	
9	28. 8. 27~28	全日本ソーラー&人力ボートレース大会2016にて一時間耐久レース3位	商船学科	
10	28. 8. 24~25	全国高専体育大会(陸上競技) 男子400mハードルで5位入賞	制御情報工学科	
11	28. 8. 22~23	平成28年度 生産技術コンテストで準優勝	専攻科(生産システム工学専攻)	
12	28. 8. 6	英語スピーチコンテストで優秀賞を受賞	商船学科	
13	28. 6. 26	鳥羽商船高専カッター部 人命救助で表彰	カッター部	
14	28. 4. 23	Microsoft Imagine Cup日本大会に2チーム出場	制御情報工学科	

別添様式		平成28年度年度計画達成状況		
年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)	
1 教育に関する事項				
(1) 入学者の確保				
① 県内外中学校(秋季:約150校、春季:約170校)を訪問し、中学校教員に本校の特色、教育内容、入試制度等の説明を行うとともに、中学校からの要望等を収集し、以後のPRに反映する。	教務	入試支援	① 春季学生募集PR(6月:139校)、秋季学生募集PR(10~12月:221校)による中学校訪問及び南勢地区中学校主催の進路説明会において、進路指導教員に入試制度の説明等を行うとともに、中学校からの要望等を聴取・分析し、今後の学生募集PR活動に反映させた。	
② 学校行事、各種イベント開催、コンテスト参加等について、事前にマスメディアに通知し、テレビ放送や新聞等で報道されるよう努める。	広報・公開	総務	① 学生の活躍や学校行事の掲載について、各部署に対し、積極的に情報提供を促し、日々、ホームページの更新を行った。特に、高専プロコン及び高専ロボコンの受賞並びに全国大会出場については、懸垂幕等で本校のPRを行った。	
③ 入試広報室を中心に、中学校主催の「進学説明会」等(約20校)に出席し、本校の特色、教育内容、入試制度等の説明を行うとともに、中学校からの要望等を収集し、以後のPRに反映する。	教務	入試支援	① 南勢地区中学校主催「進路説明会」(24校)に参加(5~11月)し、本校のPRを行うとともに、進路担当教諭から要望等を聴取・分析し、その後の学生募集PR活動に活かした。	
④ 工業系学科志願者については、特に県内中学校からの志願者増加を目指し、入試広報室を中心に、中学校・学習塾等に対する積極的なPR活動を展開する。	教務	入試支援	① 春季学生募集PRにおいて、県内中学校139校に巡回PRを実施した(6月)。 ② 秋季学生募集PRにおいて、県内中学校及び近隣県221校に巡回PRを実施した(10~12月)。 ③ 学習塾関係者を対象とした進学説明会を実施した(11月8日)。	
⑤ 商船学科志願者については、特に全国からの志願者増加を目指し、海事関連機関との連携のもとで、PR活動を継続実施する。	教務	入試支援	① 国立高等専門学校(商船学科)5校合同進学ガイダンス(横浜、神戸、広島)において、本校のPR活動を行った(6~7月)。 ② 航海訓練所練習船の寄港地16港にリーフレットを送付し、本校のPR活動を行った(4~2月)。	
⑥ 四日市港や名古屋港で開催される港まつりに参加し、練習船鳥羽丸を活用した本校のPR活動を展開する。	広報・公開	入試支援	① 四日市港まつりに参加し、本校のブースにおいて、各学科のPR活動を行った。また、鳥羽丸の一般公開では、520名を超える見学者があった(8月6~7日)。 ② 名古屋港での航海訓練所「海王丸」の寄港に伴う練習船公開事業に参加し、鳥羽丸の一般公開・見学航海を行い、143名の見学者があった(11月12日)。	
⑦ ホームページに「トピックス」、「イベント情報」、「学生の活躍」、「卒業生の進路」などを随時掲載し、本校のPR活動に努める。	広報・公開	総務	① 学校だよりを年2回発行(7・12月)し、卒業生の進路、学生活動の紹介、国際交流事業の報告、新設備の紹介を掲載するなど情報を発信し、本校のPRを行った。	
⑧ 中学生とその保護者及び教諭を対象とした「学校説明会」を実施し、練習船の体験航海、ロボット製作などの体験プログラムを通して本校への理解を促進し、志願者増加に努める。	教務	入試支援	① 「学校説明会」を開催し、中学生231名、保護者150名、進路指導教員18名、合計399名の参加者があった。説明会では、各学科の紹介を行うとともに、練習船の体験航海や実験・実習を体験してもらい、本校のアピールを行った(8月10~11日)。	
⑨ 海学祭(新聞折り込み広告約10万部)も本校のPR活動に効果的に利用し、中学生と保護者を対象とした「入学相談会」等も実施し、できるだけ多くの志願者からの相談に応じるようにする。	教務	入試支援	① 海学祭において、「入学相談会」を実施し、29組の参加者があった。また、来校者には、学校案内やパンフレットを配布し、本校のPRを行った(10月30日)。なお、今年度はアンケート結果により、効果が薄いと判明した新聞折り込み広告は見合わせ、中学校巡回PRに注力した。	
⑩ 機構作成のパンフレット「きらきら高専ガール」等を活用した女子中学生向けPR活動を行う。	教務	入試支援	① 中学校への巡回PRにおいて、「きらきら高専ガール」のパンフレットを配布し、PRを行った。 ② 学校説明会や海学祭においても、女子中学生を中心に、「きらきら高専ガール」のパンフレットを配布し、PRを行った。	
⑪ 今年度からリニューアルした広報用パンフレット等を活用したPR活動を展開するとともに、パンフレット等の内容に関する意見を真摯に聴取する。また、進学情報誌等も活用したPR活動に努める。	教務	入試支援	① 中学生を対象とした広報用パンフレットについては、今年度よりデザイン、掲載内容を刷新した。特に写真を多く取り入れ、見やすくし、本校に関心を持ってもらえるように工夫をした。	
⑫ 全ての入学者選抜方法において、アドミッションポリシーを配慮したものとしたが、その評価法が適切であるか、更なる検討を行う。	教務	入試支援	① 学力検査選抜における調査書の評価方法については、アドミッションポリシーとの適合度をある程度反映できていると考えるが、今後の分析も必要である。	
⑬ 入試に関わるミスの防止に向けて、実施マニュアルの改訂、チェック体制の再点検及び教職員への学生募集要項等の周知徹底をはかる。	教務	入試支援	① 昨年度は、マークシート方式による解答に変更になったため、新たな実施マニュアルを作成した。また、今年度は、実施マニュアル(学力検査監督要領・監督者の執務要領等)を見直し更新した(2月)。 ② 中学校巡回PRにおいては、学生募集要項を熟読の上で、質問等に答えるよう、教務主事から担当者に指示があった。	
⑭ 県外受験地(東京、名古屋、大阪、岐阜)及び県内最寄校受験地として鈴鹿において学力検査を実施する。	教務	入試支援	① 昨年に引き続き、県外の受験希望者のいる地域(東京、名古屋、大阪)及び岐阜工業高専並びに県内最寄校受験地として鈴鹿工業高専において学力検査を実施した(2月19日)。	

年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)
⑮ 県内中学校の志願状況を分析し、志願者数の少ない中学校に対しての重点的なPR活動に活かす。	教務	入試支援	① 各中学校の志願状況を分析し、志願者数の少ない中学校を含め、重点地域を設けて積極的にPR活動を行った。近隣の県立高校への中学校別入学者数等について調査を行い、その傾向を分析した。 ② 県外のPR活動については、在校生(志願者含む)の出身中学校のほか、今年度から志願者が見込まれる愛知県にも範囲を拡大しPRを実施した。
⑯ 前年度までの入学志願者及び入学者数の動向を分析し、入学定員に対する実入学者数の適正化を図られるよう検討を行う。	教務	入試支援	① 過去数年間分の入学志願者に対する実入学者数を調査し、適正な入学者数を確保した。 ② 体験学習選抜及び推薦選抜を合わせた募集人員を各学科の入学定員の85%を超えないものとした。
⑰ 受験生に対して本校の志望動機等についてアンケート調査を実施し、次年度のPR活動に活かす。	教務	入試支援	① 学校説明会において、学科の印象及び受験希望等のアンケートを実施し、PR活動の参考とした(8月)。 ② 受験生に対して、試験終了後、本校への志望動機や、入学の意思等についてのアンケートを実施し、PR活動に活かした。
⑱ 在学生に対する本校就学に関するアンケートを実施し、本校の教育目標及び学科の教育目的の達成度を検証する。	教務	教務	① 新年度に在学生(新4年生)に対してアンケートを実施し、本校の教育目標及び学科の教育目的の達成度を検証する。
⑲ 教育施設・設備や学寮等の学生就学環境の向上を目指した整備に努める。	教務 寮務 施設環境整備	教務 学生生活 施設	① 学寮定員の見直し、寮室の空室の有効利用等について検討を行った。
(2) 教育課程の編成等			
① 商船学科の在り方について、将来計画に関する検討を継続して行う。	将来計画	企画・地域連携	将来検討委員会を開催(第1回:10月11日、第2回:12月13日、第3回:2月6日、第4回:2月23日)した。 ① 商船学科の高度化を踏まえて将来構想についての検討を行った。若手教員を中心としたWGを設置し、素案の検討を進めた。 ② 商船学科の高度化を踏まえた”KOSEN(高専)4.0”イニシアティブの事業展開について検討し、申請内容を策定した。 ③ 三つの方針について検討し、策定した。
② 高度連携関係にある鈴鹿工業高専との教育・研究等の協働について、具体的な実現に向けて引き続き検討し実施する。	校長	総務補佐	① 第12回鳥羽商船高専と鈴鹿工業高専との連携強化推進委員会を開催し、両校の主事による教務、学生、寮務、研究の各分野題及び事務部長間での連携事項について協議し、協力体制の強化を図った(7月7日)。また、第13回同会議を開催し、連携事項の検証を行い、実施できた連携事項と課題について報告を行った(3月6日)。
③ 工業系2学科の再編についての検討を継続する。	将来計画	企画・地域連携	将来検討委員会を開催(第1回:10月11日、第2回:12月13日、第3回:2月6日、第4回:2月23日)した。 ① 平成31年度学科改組に向け、地域貢献及びIOT(Internet of Things)など、本校の特色を活かした新学科の検討を行った。若手教員を中心としたWGを設置し、素案の検討を進め、3月23日に機構本部と学科改組に関する第1回目の打ち合わせを行った。 ② 工業系学科の改組に向けた取組みを盛り込んだ”KOSEN(高専)4.0”イニシアティブの事業展開について検討し、申請内容を策定した。 ③ 三つの方針について検討し、策定した。
④ 各学科・専攻科の教育目標やカリキュラムに反映させるため、卒業生に対し、在学中に身に付けた資格・能力の有用度に関するアンケート調査を定期的実施するが、今年度はその回収率を向上させるための方策を検討し、その上で、次年度にアンケートを実施する。	教務	教務	① 教務主事室及び教務委員会において、アンケート方法及びアンケート内容について、検討を行った。
⑤ 機構が示す社会・産業・地域ニーズ等の統一的な把握方法により、ニーズの把握を行うとともに内容について検討を行う。	校長	企画・地域連携	① 高専機構の「学科改組及び国立高専における学科改組等の検討状況調査結果」を基に、今後の学科改組の検討に向けて、他高専の情報把握及び地域ニーズの把握に努めた。また、将来計画委員会において、商船学科の将来構想及び工業系学科の改組について検討を行った。
⑥ 英語、数学、国語の3教科については、入学直後に学力試験を実施し、各学生の学力を把握し、授業方法の工夫に反映させる。	教務	教務	① 1学年を対象に入学直後に英・国・数の業者テストを実施した(4月)。 ② 1学年、2学年対象に業者試験結果分析の講演会を実施した(10月)。 ③ 1学年を対象に入学後7ヶ月の学習成果を把握するために、英・国・数の業者テストを実施した(12月・1月)。 ④ 2学年、3学年を対象に英語の学力の推移を確認するために業者テストを実施した(12月)。 ⑤ 1学年対象に12月、1月に実施した業者試験の結果分析の講演会を実施した(2月)。
⑦ 1,2年次までの基礎学力の強化対策をカリキュラムとは別に実施する。	教務	教務	① 基礎学力向上対策WGを設置し、1学年、2学年対象に補修等を実施した。

年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)
⑧ TOEIC IPテストを学校行事として年複数回(2回以上)実施する。	教務	教務	① 前期に4、5学年全員に実施した。後期は希望者対象に実施した。
⑨ 授業評価アンケートを実施し、結果を各教員へフィードバックすることで、各教員が改善計画を立て、教授法の改善努力をする。	教務	教務	① 平成27年度の授業評価アンケートに基づいて、全教員から授業改善計画を提出させ、改善努力を促した。 ② 前期・後期終了科目の授業アンケートを実施した。 ③ 平成28年度の授業評価アンケート結果を各教員へフィードバックした。 ④ 教員が自由に他の教員の授業を参観できる日を設定し、授業方法の参考にした。
⑩ 学生の意欲向上や高専のイメージの向上に資する「全国高等専門学校体育大会」や、「全国高等専門学校ロボットコンテスト」、「全国高等専門学校プログラミングコンテスト」、「全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテスト」、「インターハイ」等の全国的な競技会やコンテストに積極的に参加する。	教務 学生生活	入試 支援 学生生活	① 全国高校総合体育大会(インターハイ)に少林寺拳法部が出場した。全国高専大会に、陸上競技部、水泳部、柔道部、剣道部、バスケットボール部が出場した。また、バスケットボール競技については、本校が担当し伊勢市で開催した。 ② Hack U 2016(9月):優秀賞を受賞した。 ③ 全国高等専門学校ロボットコンテスト東海北陸地区大会(10月):アイデア賞、特別賞を受賞した。 ④ 全国高等専門学校ロボットコンテスト全国大会(11月):出場した。 ⑤ 全国高等専門学校プログラミングコンテスト(10月):自由部門において最優秀賞、文部科学大臣賞、企業賞を受賞した。 ⑥ 第5回 高校・高専『気象観測機器コンテスト』で最優秀賞と特別賞を受賞した。
⑪ 地域社会におけるボランティア活動を継続して行う。	教務 学生生活	教務 学生生活	① 伊勢神宮参拝車いす介助ボランティアに参加した(7月23日)。 ② 鳥羽警察署による交通安全・防犯に関する啓発活動に学生が参加した(10月20日、12月1日)。
(3) 優れた教員の確保			
① 教員組織が多様な背景を持つ教員で構成されるよう、教員採用に際し、本校、高専機構、国立研究開発法人科学技術振興機構のホームページによる公募及び関係大学、民間企業に公募要領の送付を行うなど広く公募を行い、公募制の徹底を図る。	教員 選考	人事 労務	① 教員採用に際し、全国の高専、大学等関係教育機関、民間企業に公募要領を送付した。また、JREC-IN、高専機構本部及び本校のホームページに公募要領を掲載した。教員(海事職)採用に際しては、鳥羽海事事務所へ求人票を提出し、求人を行った。 ② 同窓会のホームページの「求人データベース」に、教職員募集情報を掲載した(6件)。
② 高専間での任期を付した人事交流を行い、教員の活性化を推進する。	教員 選考	人事 労務	① 高専・両技科大学教員交流制度により、他高専へ教員1名を相互に派遣した(平成28~29年度)。
③ 専門科目については、博士の学位を持つ者や職業上の高度の資格を持つ者、一般科目については、修士以上の学位を持つ者や民間企業等における経験を通して高度な実務能力を持つ者など優れた教育能力を有する者の採用を促進する。	教員 選考	人事 労務	① 専門科目(海事職以外)については、博士の学位を有している(採用日前月末までに取得見込みの者を含む)者の登用を図った。 ② 専門科目(海事職)については、二級海技士以上の資格を有する者の登用を図り採用に至った。
④ 退職教員の後任採用にあたっては、女性教員の優先的採用を推進するとともに、女性教員の積極的な登用を図る。	教員 選考	人事 労務	① 教員公募において、「男女共同参画社会基本法」の趣旨に基づき、評価が同等であれば女性を優先して採用する(全7公募中6件の公募に実施)など積極的な登用の推進を図った。
⑤ 女性教職員の就業環境整備のための要望を聞き、できる限り、改善に努める。		施設	① 記念資料館改修時に共同のトイレと浴室を男女別に改修を行った(11月)。女性教職員に環境整備のための要望書の様式を配布した(11月)。
⑥ 高専機構の主催するFD研修会や教育研究集会等の各種研修に積極的に参加させることにより、教員の能力向上を図る。	教務	人事 労務	① 平成28年度高専機構主催の管理職研修に1名、中堅教員研修に1名が参加した。 ② 平成28年度FD・SD研修として、「災害弱者の視点からの地震津波避難対策の考え方と実践」と題して防災講演会を実施し、教員22名が参加した(5月31日)。 ③ 平成28年度FD・SD研修として、「自閉スペクトラム症あるいは広汎性発達障害」と題して講演会を実施し、教員39名が参加した(7月26日)。 ④ 平成28年度FD・SD研修として、「健康を考える(自身の健康・部下の健康)」と題して講演会を実施し、教員2名が参加した(9月12日)。 ⑤ 平成28年度FD・SD研修として、練習船鳥羽丸による研修を計画した。(当日は天候不良のため実施見送り) ⑥ 平成28年度FD・SD研修として、「学生の自殺防止について」と題して講演会を実施し、教員45名が参加した(10月18日)。
⑦ 国立高専機構教員顕彰に候補者を推薦する。	校長	人事 労務	① 平成28年度国立高等専門学校教員顕彰の若手部門に1名、一般部門に1名を推薦した。
⑧ 国立高専機構の制度を活用して、内地研究員及び在外研究員の派遣に努め、教員の教育研究能力の向上を図る。	校長	企画・ 地域連携	① 平成29年度国立高等専門学校在外研究員として、イスタンブール工科大学(トルコ共和国)に1名派遣が決定した。また、平成29年度早稲田大学の訪問学者(内地研究員)として、1名派遣が決定した。

年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)
(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム			
① MCCに準拠したWebシラバスを作成しているが、各科において各科目の到達目標、ルーブリック評価及び授業計画等が学習到達目標を達成させる上で妥当であるか検討する。	教務	教務	① 成績評価の結果を踏まえて、各学科に学習到達目標等の設定についての検討を依頼し、次年度のシラバス作成に反映させた。 ② 他商船高専（商船学科）と協力し、商船学科のMCCを作成した。
② アクティブラーニング等の導入について把握し、授業内容や教授法の改善に向けて、学内での情報共有をはかる。	教務	教務	① 教員間の授業見学会を実施した（10月）。 ② 奈良工業高専主催の「アクティブラーニング研修会」に教員2名が参加した（10月15日）。 ③ 第3ブロック「アクティブラーニング推進研究会」に教員を派遣した。
③ 授業に深く関連し、かつ社会的評価の高い英語能力検定を含めた資格試験等の単位認定制度を見直したことで、学生の積極的な資格等の取得を促す。	教務	教務	① TOEIC-IP試験、工業英検、英検を実施した。 ② 鳥羽商船高等専門学校以外の教育施設等における学習等に関する規則を改正し、新たに危険物取扱者、TOEIC試験を単位化した。
④ 学生の交流活動の一環として他高専との学生会や寮生会の交流をもち、学生の意識向上や学生生活の活性化を図る。	学 生 寮 務	学生生活	① 本校主催のリーダートレーニングに、鈴鹿工業高専の学生会役員、学園祭役員が参加し、一緒にグループワークを行うとともに、交流行事の打合せを行った（9月30日）。 ② 本校と鈴鹿工業高専の学園祭において、学生会主体のブースを相互に出展した（10月15日～16日、30日）。 ③ 鈴鹿工業高専、豊田工業高専、沼津工業高専との連携で、寮生交流会を実施した（10月22日）。
⑤ 創造性を育む教育方法(PBL)の実践を推進する。	教務	教務	① 制御情報工学科の4年生対象の「工学実験創造実験」においてPBL教育を実践した。 ② 専攻科「生産システム工学実験」においてPBLを導入した。
⑥ 学科を越えた授業の共有や他高専との授業の共有等、新たな授業形態の在り方について、更に検討を進める。	教務	教務	① 1年生の「一般基礎教育」の授業を3学科合同で行った。 ② 他高専との授業の共有等については、第3ブロックで検討を行った。 ③ 新たな授業のあり方については、AL導入の促進やBlackBoardの活用について、第3ブロックで講習会を実施し推進した。
⑦ 平成25年度に受審した機関別認証評価結果に基づく改善を継続する。	点検評価	企画・地域連携	① 各学科の求める人材像（アドミッション・ポリシー）について、学生募集要項、学生募集パンフ及びホームページ等に掲載し、受験生、保護者及び中学校等に周知を行った。 ② 学校説明会及び中学校主催の進学（進路）説明会等において、教育目標並びに各学科の求める人材像（アドミッション・ポリシー）について説明を行った。 ③ 授業科目と準学士課程及び専攻科課程における教育の目的（学生が卒業（修了）時に身に付ける学力や資質・能力、養成しようとする人材像等）について、シラバスに明示しホームページに掲載した。 ④ 各学科・専攻の教育課程が、（学生が卒業（修了）時に身に付ける学力や資質・能力、養成しようとする人材像等）に照らし、授業科目等を体系的に編成し、シラバスに明示するとともに、ホームページに掲載した。
⑧ STCW条約に基づく資質基準を維持する。	STCW条約対策	入試支援	① 商船学科の教育内容は、「船員の訓練及び資格証明並びに当直の基準に関する国際条約」（STCW条約）に沿って行われている。今年度も、STCW条約に関する資質基準の維持に努めた。
⑨ インターンシップ参加を奨励するとともに、受け入れ企業等の開拓を積極的に行う。	教務	教務	① 平成28年度インターンシップに商船学科24名、電子機械工学科26名、制御情報工学科20名、専攻科3名が参加した。 ② 対象学生に対して、校外実習の心構え、重要性等について事前指導を行った。 ③ 進路支援システムを活用し、企業側からインターンシップ情報を登録しやすくした。 ④ 受け入れ企業については、過去のインターンシップ受け入れ先企業に加え、過去3年間の就職先企業にインターンシップの依頼を行った。
⑩ 産学官共同教育の一環として、現職並びに退職技術者による企業技術者等活用プログラムを企画・実施する。	教務	教務	① 専攻科の学生を対象に、実践的なFA制御システム開発能力を養成するため、FA制御システムの開発・教育に携わっている企業技術者に依頼し、「PBL型即戦力FA制御システムものづくり」の講座を実施した（10～2月）。
⑪ 学生及び教職員のICTスキルを向上させるための講習会を開催し、活用促進に努める。	総合情報センター	教務	① 教職員対象にハンズオンによるOffice365の講習会を実施した（10～11月）。 ② 低学年に対し、Office365等の講義を行った。
(5) 学生支援・生活支援等			
① 学生相談室の担当教職員、臨床心理士等の連携強化を図り、学生の学習・生活相談への支援及び心のケアの充実を図る。	学 生	学生生活	① 学生相談室会議を5回開催し、うち2回は臨床心理士にも出席いただき、意見を聞くなど、学生相談室内での情報共有に努めた。

年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)
② 学生の修学支援体制を整備し、学生及び保護者からの支援要請に適切に対応できるようにする。	学 生	学生生活	① 修学支援会議を2回開催し、支援要請のある学生について、関係教職員間で情報共有し、個別に学習支援等を進めた。
③ 健康管理(メンタルヘルス、薬物乱用等)、交通安全等に関する講習会を開催する。	学 生	学生生活	① 1年生の一般基礎教育の授業において、臨床心理士による講演会「イキイキ学生生活コミュニケーション編」を実施した。 ② 自転車使用許可を受けた学生(通学生、寮生)に対して、「自転車安全講習会」を実施した(6月27日)。 ③ 自動車通学許可を受けた学生に対して、「自動車安全講習会」を実施した(7月17日)。 ④ リーダーストレートニングにおいて、臨床心理士による研修会「集団でのコミュニケーションスキル」及び「グループ活動とコンセンサスによる集団決定」を実施した(8月30日)。
④ 学校医による定期的な健康相談を実施する。	学 生	学生生活	① 学校医による内科健康相談(10月28日)、眼科健康相談(10月6日・12月1日)、耳鼻科健康相談(10月13日・12月8日)を実施した。
⑤ 保護者懇談会を含め、保護者からの学生に関わる相談に応じ、学生支援体制に活かす。	教 務	教務学生生活	① 寮生保護者懇談会を年2回(6・10月)開催し、前期89世帯、後期73世帯の保護者が出席し、学寮運営についての意見交換を行った。 ② 保護者懇談会を年2回(6・10～11月)開催し、保護者に対し学校での学習、生活等の情報提供を行うとともに、保護者からの要望等についての意見を聴取し、学級担任会議等で検討し、学生支援体制に反映させた。
⑥ 寮生の学生寮での生活・学習環境を調査し、学生寮寄宿舎整備計画を策定し、整備を進める。	寮 務	学生生活	① 寮生の学習環境を調査し、低学年の学習習慣の定着のため、自習室を整備した。
⑦ 学生の学習支援施設としての図書館の学生用図書の実質を推進する。	図 書 紀 要	図書	① 学生用図書については、順次購入を進め、今年度はおよそ1,400冊増加した。
⑧ 授業料免除や奨学金制度について、学生への周知を図るほか、ホームページ等によって詳細な情報の提供を行う。	学 生	学生生活	① 授業料免除や奨学金制度については、ホームページに掲載を行うとともに、保護者へ案内状を郵送付し、情報提供に努めた。
⑨ 日本学生支援機構による奨学金制度のほか、近藤記念海事財団奨学金、海技教育財団奨学金等の各種奨学金制度についても、学生への情報提供を積極的に行う。	学 生	学生生活	① 上記のほか、学生課前等にポスター掲示を行い、学生への情報提供に努めた。
⑩ 卒業予定者に対し適切な進路指導を行うとともに、就職活動に備え、外部講師を招いて就職ガイダンス等を開催する。校内就職支援セミナーを実施する。	教 務 学 生	教務学生生活	① 本科4年生、専攻科1年生を対象に、外部講師を招き、模擬面接を含む就職指導講演会を実施した(12月19日)。 ② 一般基礎教育1(本科全1年生)において、就職・進学に関する講演会を実施した(1月25日)。 ③ 本科3年生、4年生、専攻科1年生を対象に、校内就職支援セミナーを実施した(2月14日)。
⑪ 教員の企業訪問および企業の学校訪問の受け入れを積極的に行い、学校と企業の情報交換を深め、求人への継続的確保を図る。	就 職 対 策 学 生	学生生活	① 教員が学生のインターンシップ企業に訪問したり、企業からの訪問を積極的に受け入れて、求人への確保を図った。
⑫ 海運企業及び海事関連機関との情報交換を深め、海上就職率を上げるための取組を積極的に行う。	就 職 対 策 学 生	学生生活	① 海運企業等の訪問を積極的に受け入れている。また、中部運輸局主催の若年内航船員確保対策懇談会に商船学科長が出席し、意見交換を行った(12月1日)。
⑬ 学生の海上就職への志向性を高めるとともに、特に外航海運会社就職のために必要な知識・能力向上のための教育改善に取り組む。	就 職 対 策 学 生	学生生活	① 商船学科を有する5つの高等専門学校と海事関連4団体が連携して、大学間連携共同教育推進事業である「海事分野における高専・産業界連携による人材育成システムの開発」に取組み、商船学科の教育改善に努めた。 ② 商船学科の15名の学生が、日本郵船、川崎汽船などの外航海運企業のインターンシップに参加した。
(6) 教育環境の整備・活用			
① 教育研究設備の整備について、設備マスタープランの更新を行う。	校 長	調達	① 平成28年度設備マスタープランを基に予算要求を行った。また、平成29年度設備整備計画に向けて設備マスタープランの更新を検討し、予算要求を行った。
② 無線LANをはじめとする、校内ネットワーク環境の整備を行いアクティブラーニング等の学習環境の充実を図る。	総 合 情 報 セ ン タ ー	総務	① 学内の無線LAN環境の接続状況及びセキュリティ状況を改善した。
③ キャンパスマスタープランの見直しを行う。	施 設 環 境 整 備	施設	① キャンパスマスタープランの見直しを行い、原案を作成した。
④ 省エネ化は空調設備の高効率化及び照明のLED化を行っていく。	施 設 環 境 整 備	施設	① 今年度は、記念資料館の空調を更新した。また、照明のLED化を行い省エネ化を図った。
⑤ アクティブラーニング等の充実を図るため、図書館改修の計画をし、調査等を行う。	施 設 環 境 整 備	施設	① 図書館改修のための検討を行った。

年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)
⑥ 屋内運動場の天井落下防止対策は平成27年度に完了している。引き続き、耐震の調査が必要であると思われる、艇庫の耐震診断を行う。	施設環境整備	施設	① 艇庫の耐震診断について、設計士と調査内容、時期等に関する打ち合わせを行った。
⑦ 学生及び教職員を対象に、常時携帯用の「実験実習安全必携」を配付するとともに、労働安全衛生管理に関する講習会等に教職員を積極的に参加させる。	安全衛生	人事 労務 教務	① 平成28年度AED研修（普通救命講習会）に教員5名、事務系職員5名の計10名が参加した。 ② 入学生及び新規採用等教職員に、常時携帯用の「実験実習安全必携」を配付した。
⑧ 男女共同参画に関する意識啓発のため、男女共同参画に関する情報を教職員へ提供する。 また、外部が主催する男女共同参画に関する研修等にも教職員を積極的に参加させる。	校長	総務	① 男女共同参画推進室を設置（6月）し、男女共同参画に関する情報提供を随時行った。また、第3ブロック男女共同参画推進担当者会議に参加し、情報交換及び情報共有を行った。
2 研究や社会連携に関する事項			
① 研究の推進、各種プロジェクトへの応募及び外部資金獲得に積極的に取り組み、自己収入の増加に努める。	校長	企画・ 地域 連携	① 研究の推進を図るため、研究主事の下に研究主事補4名（各学科1名）を配置し、業務遂行の円滑化を図った。 ② 練習船を利用した学術研究、海事関連普及活動及び地域連携活動を図るため、練習船等の利用について必要な事項を定めた、「鳥羽商船高等専門学校練習船等の利用に関する内規」を定めた。
② 外部資金獲得状況を学内で全教員に周知し共有することにより、外部資金データベースの効率的活用を維持する。	校長	企画・ 地域 連携	① 外部資金獲得状況を教員会議で周知するとともに、更なる増加に努めるよう啓蒙した。 ② 第3ブロック研究協働共有化推進WGにおいて、研究連携のためのデータベース及び共有可能設備のデータベースに基づき、研究活動の推進について検討を行った。
③ 高専間共同研究を推進する。	校長	企画・ 地域 連携	① 民間企業1社、鈴鹿高専との共同研究を検討を行った。今後、次年度以降に更に検討を進める。
④ 各教職員の持つ新技术をwebページ上に掲載する。	研究主事	企画・ 地域 連携	① 全教員にJSTのデータベース（research map）への登録を義務付けた。 ② 高専機構主催の（research map 説明会）開催を周知した（11月30日）。
⑤ 高専機構が主催するの新技术説明会への参加を促す。	研究主事	企画・ 地域 連携	① 高専機構主催の新技术説明会等については、全教員に開催案内を周知し、積極的な参加を促した。
⑥ 外部研究経費の新規獲得事例を増やすため、各教職員の分野に応じて個別に紹介を行う。	研究主事	企画・ 地域 連携	① 高専機構研究・産学連携推進室及び高専機構産学連携コーディネータ（東海北陸地区担当）等からの競争的資金等の公募情報については、他高専の教員との共同研究も含めて積極的に応募するよう、教員に周知を行った。
⑦ 科学研究費補助金等への申請率60%を目標に取り組みを強化し、採択率の向上に努める。（平成27年度、教員・技術職員による申請率は50%）	研究主事	企画・ 地域 連携	① 科学研究費補助金の申請率を向上させる取り組みとして、教員会議において全教員に申請を促すと同時に、校長裁量経費配分方針として、科学研究費補助金等競争資金申請者を優先した結果、34名の申請があった（教員のみ：申請率68%、昨年度63%、技術職員含む：申請率52%、昨年度50%）。
⑧ 各教職員へ学会、展示会等への参加を呼びかけ実質的な研究・教育成果の公表につなげる。	研究主事	企画・ 地域 連携	① 「みえリーディング産業展2016」において、産学官連携ブースに「グローバルステージで活躍しよう」をキャッチコピーに出展し、各学科紹介のパネル展示や、ドローンを利用した防災減災地図作成システム「みつばちず」と害獣檻遠隔監視・操作システム「まるみえホカクン」の展示を行った（11月11～12日）。
⑨ 地域や業界等からの各教職員および学校へ向けられた要望を集め、関係する教職員、団体へ返答する試みを実施し、新たな共同研究等へ結びつけるようにする。	研究主事	企画・ 地域 連携	① 民間企業等からの試作品開発依頼等については、メール及び教員会議において幅広く周知し、対応が可能か等の検証を行った。
⑩ 機構からのコーディネート活動に関するスキル等の紹介を受け、それを本校へ適用可能な部分を精査し、生かす。	研究主事	企画・ 地域 連携	① 民間企業等からの試作品開発依頼等については、メール及び教員会議において幅広く周知し、対応が可能か等の検証を行った。
⑪ 地方自治体、法人、民間企業等からの技術相談に応じるとともに、交流会等に積極的に参加し、受託研究・共同研究等への発展を目指す。	テクノセンター	企画・ 地域 連携	① 産業展、フォーラム及び交流会等に積極的に参加し、企業等と情報交換を行い企業等のニーズの把握に努めた。 ② 企業からの技術相談については、企業等を訪問し、問題点を把握するとともに、共同研究、受託研究についての検討を行った。 ③ ホームページのテクノセンターの 카테고리を更新し、共同研究、受託研究、技術相談等の内容を説明するとともに、各取扱規則、申請手順を明確にした。
⑫ 地域社会における産学官連携を推進するため、地域の関係機関等と情報交換等を行う。	テクノセンター	企画・ 地域 連携	① 鳥羽商工会議所の工業部会と今後の産学連携に関する打合せを行った（11月9日）。

年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)
⑬ 知的財産に関する講演会またはweb講演会等の実施情報を集め、教職員に周知、参加を呼びかける。	研究主事	企画・地域連携	① 高専機構主催の平成28年度知財研修会に教職員が参加した(9月27日)。
⑭ 知的財産コーディネーターの利用が本校からの利用が有効的であるか、検討する。	研究主事	企画・地域連携	① 隔月で開催される、東海・北陸地区高専コーディネーターTV会議に参加し、a)外部企業等との連携 b)共同研究等に係る問題点 c)各校の知的財産の取り組み状況 d)コーディネーター活動等の情報交換を行った(5月31日、7月27日、9月29日、1月30日)。
⑮ 機構による知的財産の状況調査結果を吟味し、本校で利用可能な事例がないか確認し、必要に応じて紹介する。	研究主事	企画・地域連携	① 隔月で開催される、東海・北陸地区高専コーディネーターTV会議に参加し、a)外部企業等との連携 b)共同研究等に係る問題点 c)各校の知的財産の取り組み状況 d)コーディネーター活動等の情報交換を行った(5月31日、7月27日、9月29日、1月30日)。
⑯ 本校の産学連携事例を調査し、web上で事例紹介を行う。	テクノセンター	企画・地域連携	① 平成28年度の産学連携事例について、ホームページやテクノセンターの活動実績として、事例紹介を行った。
⑰ 過去の産学連携事例をピックアップし、教職員に普及に努めるよう周知する。	テクノセンター	企画・地域連携	① 平成28年度の産学連携事例について、ホームページやテクノセンターの活動実績として、事例紹介を行った。
⑱ 本校教職員の専門分野、研究開発実績等を紹介する「研究シーズ集」を更新して、受託研究、共同研究、技術相談等の推進に活用する。	テクノセンター	企画・地域連携	① 受託研究、共同研究、技術相談等の推進を図るために、教員の業績のデータベースへの登録・更新を目的とした、JSTのresearch mapへの登録を義務付けた。
⑲ 公開講座の参加者に満足度や次回のテーマ等についてアンケート調査を実施し、満足度が7割以上になるようコンテンツの改善に努める。	広報・公開	企画・地域連携	① 平成28年度公開講座として、「サイテクランドin鳥羽商船」(7講座)、「英文多読入門講座」及び「小学生のためのバレーボール教室」を実施し、142名の参加者があった。参加者全員を対象に満足度のアンケート調査を実施した結果、「満足」及び「概ね満足」は98%であった。 ② 平成28年度の新たな講座として、受験をまじかに控えた中学3年生を対象に、数学・理科の講座を開講し、学力の向上を図ることを目的とした「入試対策講座」を実施した(12月3日)。
⑳ 教育委員会や小・中学校と連携した出前授業を実施し、「ものづくり教育」、「理科教育」等の支援を行う。	広報・公開	企画・地域連携	① 鳥羽市、志摩市、伊勢市及び熊野市の小中学校及び教育委員会と連携し、「ipadを使用した下敷き作り」など、出前授業を8講座実施した。今後、PR範囲を拡大し、「ものづくり教育」、「理科教育」等の支援を行うこととした。 ② 鳥羽志摩教育研究会の中学校教員を対象とした出前授業「オリジナルTシャツ・バッグ作成講座」を実施した(10月12日)。
㉑ 小中学生を対象とした理科・科学イベントに出展し、地域における理科・科学技術に対する関心を高めるよう努める。	テクノセンター	企画・地域連携	① 伊勢志摩サミット「お祭り広場」に参加し、電子機械工学科のパネル展示を行なうとともに、「3Dプリンターによる3Dプリント実演」、「自作キーホルダー作り」、「顕微鏡による真珠の観察」などの体験学習講座を実施した(5月22日)。 ② (一社)鳥羽青年会議所青少年育成事業「集まれ!七夕♪夕涼み♪」イベントに、制御情報工学科が参加し、小・中学生及び地元住民にものづくりの楽しさを体験していただいた(7月7日)。 ③ 地元池上町の小中学生及び保護者を対象とした「ロボット教室」を実施した(10月22日)。
㉒ 一般市民の利用促進のため、本校図書館についての紹介を公開講座等の案内時に同封するとともに、地元の広報紙へは図書館の利用案内の掲載を依頼する。	図書紀要	図書	① 一般市民に図書館の利用を促進するために、次のことを実施した。a)地元の市が発行している広報紙(広報とば・広報しま)に利用案内の掲載を依頼した(4月27日)。b)公開講座の案内送付の際に県内の中学校に、図書館の利用案内等を送付した(6月20日)。c)中学生を対象とした英文多読の公開講座を受講した教員から、勤務中学校での英文多読の実践授業のために、英語の絵本の貸出依頼があり、対応した(9月20日)。d)学校祭において、英文多読用図書の展示とパンフレットを閲覧室入口のスペースに配置し、PRを行った(10月30日)。
3 国際交流に関する事項			
① 他機関等との連携を図り、国際交流の推進に努める。	国際交流推進室	総務	① 本校主幹で、MELキャンプ(9月)、SMA鳥羽丸トレーニング(9月)などの3事業を実施した。 他高専主幹の英語キャンプ(熊本高専)(8月)、KCC国際インターナショナル(10月)などの4事業についても、連携し実施した。 ② 第3ブロックにおける国際交流推進担当者会議に出席し、情報共有を図った。 ③ 機構本部と連携して学生の短期留学推進を図るため、新規留学先(ニュージーランド)の開拓及び企画の検討を行った。
② シンガポール・ポリテクニク及びイスタンブル工科大学との国際交流の推進に努める。	国際交流推進室	総務	① シンガポール・マリタイム・アカデミーと、交流協定を更新した(9月)。 ② イスタンブル工科大学から、教員を一名招聘し、より一層の国際交流推進を図った(10~3月)。

年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)
③ 国際交流による受け入れ学生の滞在・生活環境整備に努める。	国際交流推進室	総務	① 協定校SMA（シンガポール・マリタイム・アカデミー）から短期留学生12名を受け入れた際、宿泊場所（練習船鳥羽丸）、寝具等について便宜を図った（9月）。
④ 学生の海外留学、海外派遣を推進、支援するための方策を検討する。	国際交流推進室	総務	① 学生の海外留学推進を図るため、日本学生支援機構からの奨学金支援を得た。 ② 新たな派遣先の検討を行うとともに、既存の事業についても、事業内容を見直し・検討を行った。
⑤ 外国人留学生の生活環境整備として、学生寮の施設及び設備整備を検討する。	寮務施設環境整備	学生生活施設	① 留学生を含めた寮設備については、施設環境整備委員会等において検討し、高専機構本部に営繕要求を行った。
⑥ 留学生に関する案件をふまえた寮整備のプラン策定ができ次第、改修計画を立てる準備をする。	寮務施設環境整備	学生生活施設	① 留学生を含めた寮設備については、施設環境整備委員会等において検討し、高専機構本部に営繕要求を行った。
⑦ 留学生については、異文化理解等を目的に日本文化施設の見学会や留学生交流会などを企画し実施する。日本語補講及び日本文化を学ぶ体験学習を実施する。	教務	教務	① 留学生課外補講（茶道教室）を実施した（10～12月）。 ② 日本の文化・風土に対する理解を深め、他高専との交流を促進するための見学旅行を、鈴鹿工業高専と合同開催した（12月3～4日）。 ③ 国立乗鞍青少年交流の家において実施する、東海地区高専の留学生を対象とした交流会に参加した（12月23～25日）。
⑧ 日本人学生のグローバル人材育成の一環として、各種学内イベントにおける留学生の積極的活躍を企画し、実施する。	教務	教務	① 留学生が、学生・教職員向けの母国紹介講演を行った（6月9日）。 ② 海学祭において、留学生が母国料理の模擬店を開いた（10月29～30日）。 ③ 留学生日本語教育（課外補講・見学旅行）を行い、留学生の日本の伝統文化の理解を深めるとともに、チューター、教職員との交流を図った（12月3～4日）。
4 管理運営に関する事項			
① 運営諮問会議を開催し、中期目標・中期計画、年度計画及び本校の将来計画についての提言を得る。	校長	企画・地域連携	① 運営諮問会議を開催し、平成28年度年度計画の達成状況及び本校の現状と課題について説明を行うとともに、委員の方から提言を得た（3月16日）。
② 業務の集約化及びアウトソーシングを検討する。	事務部	調達	① 鈴鹿工業高専と連携し、経費削減及び業務の合理化を目的とした打ち合わせを行った。 ② 校内の草刈り、会場設営等の軽作業において、外注化を行った結果、本務に専念することができた。
③ 高専機構作成「コンプライアンス・マニュアル」及び「セルフチェックリスト」により、教職員のコンプライアンスの向上を図る。	校長	総務	① コンプライアンスに関するセルフチェックを全教職員に実施し、教職員のコンプライアンスの向上を図った（11月）。
④ 業務分担等を整理するとともに、各種業務マニュアル、事務引継マニュアルの整備を行う。	事務部	総務課 学生課	① 平成27年度に業務分担等の見直しを行うとともに、人事労務業務マニュアル、調達業務マニュアル、厚生補導マニュアルなど各種業務マニュアル、事務引継マニュアルを作成した。引き続き、同マニュアルの見直しを行った。
⑤ 公的研究費等に関する不正使用の再発防止策を確実に実施するとともに、教職員への不適正経理の防止についての周知を定期的に行う。	校長	財務経理	① 本校ホームページ内で「研究不正等に対する取組」を掲載し、周知を行った。 ② 平成27年4月1日付けで「鳥羽商船高等専門学校における公的研究費等の取扱いに関する内規」を制定し、コンプライアンス推進副責任者を定めた。平成28年度は、教職員への不適正経理の防止について周知徹底を行なうなど、公的研究費の不正使用の再発防止策を実施した。 ③ 教職員を対象としたコンプライアンス教育研修を実施した（1月17日、2月16日、2月24日）。 ④ 研究者の一部を対象に旅費のヒアリング及び非常勤雇用者の一部を対象に勤務状況についてのヒアリングを実施した（2月）。

年度計画	委員会等	事務	判断理由 (計画の実施状況等)
⑥ 事務職員及び技術職員の能力向上のため、高専機構等が主催する研修会等に積極的に参加させる。また、職員のSD研修を実施する。	事務部	人事 労務	<p>① 平成28年度高専機構主催の初任職員研修（4月20～22日）に2名、若手職員研修会（11月14～16日）に1名、情報担当者研修会（12月5～7日）に1名の計4名が参加した。</p> <p>② 平成28年度東海北陸地区高専主催の係長級事務研修（9月12～14日）に3名、技術職員研修（8月22～24日）に2名の計5名が参加した。</p> <p>③ 平成28年度国立大学法人主催の新任課長補佐研修（7月21～22日）に1名、係長研修（7月21～22日）に2名の計3名が参加した。</p> <p>④ 平成28年度全国大学保健管理協会主催の東海・北陸地方部会保健管理担当職研究集会に1名が参加した（7月28日）。</p> <p>⑤ 平成28年度全国大学保健管理協会主催の東海・北陸地方部会保健管理担当職三重地区研究会に1名が参加した（8月19日）。</p> <p>⑥ 平成28年度日本学生支援機構が主催する学生生活にかかるリスクの把握と対応セミナーに1名が参加した（12月14～16日）。</p> <p>⑦ 平成28年度FD・SD研修として「災害弱者の視点からの地震津波避難対策の考え方と実践」と題して防災講演会を実施し、事務系職員29名が参加した（5月31日）。</p> <p>⑧ 平成28年度FD・SD研修として「自閉スペクトラム症あるいは広汎性発達障害」と題して講演会を実施し、事務系職員5名が参加した（7月26日）。</p> <p>⑨ 平成28年度FD・SD研修として「健康を考える（自身の健康・部下の健康）」と題して講演会を実施し、事務系職員10名が参加した（9月12日）。</p> <p>⑩ 平成28年度FD・SD研修として練習船鳥羽丸による研修を計画した。（当日は天候不良のため実施見送り）</p> <p>⑪ 平成28年度FD・SD研修として「学生の自殺防止について」と題して講演会を実施し、事務系職員5名が参加した（10月18日）。</p> <p>⑫ 平成28年度SD研修として「情報セキュリティについて」「公的研究費等不正使用防止について」と題して実施し、事務系職員60名が参加した（2月16日、2月24日）。</p>
⑦ 事務職員については、国立大学法人、高専間等との人事交流を計画的に行う。	事務部	人事 労務	<p>① 4月1日の人事において、三重大学から1名の人事交流者を得た。</p> <p>② 高専間職員交流制度により、鈴鹿工業高専と相互に2名の人事交流を行った（平成28年～平成30年度）。</p>
⑧ 危機管理体制及び緊急時対応・設備についての見直しを行い、危機管理マニュアルの策定並びに既存資料の改訂を行う。	校 長	総務	① 危機管理マニュアルを作成するとともに、既存の各種資料等を整理・集約した。
5 業務運営の効率化に関する事項			
① 事務の効率化及び管理経費の削減を推進する。	事務部	総務課 学生課	<p>① 鈴鹿工業高専との連携強化推進委員会において、警備、清掃及びエレベーター等の役務契約については、電子入札システムを活用して、両校の役務契約をするなど、両校にとって合理的かつ経済的な会計経理のありかたの検討を行った。</p> <p>② 照明器具については、取り換えの必要なものからLED照明器具に取り換えて、電気料の削減に努めた。</p> <p>③ コピー用紙について、教育用、研究用、一般管理用の用途に応じて購入するなど、管理経費の削減を図った。</p>
② 三重大学、鈴鹿工業高専等県内の高等教育機関との連携事業を推進する。	校 長	総務課 学生課	<p>① 第12回鳥羽商船高専と鈴鹿工業高専との連携強化推進委員会を開催し、平成28年度連携・共同事業の検討を行った（7月7日、3月6日）。</p> <p>② 本校OBが主体である「NPO法人 故郷の海を愛する会」主催の「鳥羽商船高専の練習船に乗って、体験航海と造船所見学」の活動に協力した（7月22日）。また、12月10日実施のクリスマスイベントでは、各学科の体験ブース及びロボットコンテスト作品展示並びにプログラミングコンテストの作品展示を行った。</p> <p>③ 三重県生涯学習センターが主催する「みえアカデミックセミナー2016」に、県内の大学等の高等教育機関が参加し、本校からは「スマートフォンを用いた小型船舶事故対策アプリの開発」、「辞書で見る古書の世界」の演題で講演を行った（8月4日）。</p> <p>④ 近畿大学高専主催の「理系女子フォーラムみえ」に、三重大学、鈴鹿工業高専、鳥羽商船高専が参加し、女子学生が、理系の魅力（学生生活や就職後の仕事）について紹介を行った（8月30日）。</p> <p>⑤ 三重県内高等教育機関が出席する、「みえメディカルバレー推進代表者会議」、「大学サロンみえ」、「伊勢志摩地域みえ中小企業・小規模企業振興推進協議会」等に参加し、地域との連携による取組について、意見交換を行うとともに、事業等に積極的に参加した。</p> <p>⑥ 三重大学の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に、本校を含む三重県内の13高等教育機関及び地方公共団体・企業と連携し、地域イノベーションを推進する三重創生ファンタジスタの養成に向けた取組を行っている。今後も、産・官・学・民が一体となり、三重県が必要とする人材育成のための同事業を行っていく。</p> <p>⑦ 本校を含む三重県内の13高等教育機関及び三重県は、「高等教育コンソーシアムみえ」を創設、協定を締結し、平成28年4月からコンソーシアムの活動を進めた。</p> <p>⑧ 本校と鈴鹿工業高専合同で、実践的なFA制御システム開発能力を養成するため、「PBL型即戦力FA制御システムものづくり」の講座を実施した（10～2月）。</p> <p>⑨ 制御情報工学特別講義1 について、GIネットを利用し、鈴鹿工業高専に配信した（12月）。</p> <p>⑩ 留学生見学旅行を鈴鹿工業高専と合同で実施した（12月3～4日）。</p> <p>⑪ 高専シンポジウム協議会、鈴鹿工業高専、鳥羽商船高専主催の「第22回高専シンポジウムin Mie」を本校で開催し、全国から700名余りの参加者があった（1月28日）。</p>

平成 28 年度「鈴鹿高専との連携・共同事業推進計画」実施状況

- (1) 科学技術の高度化と地域産業構造等を考慮した学科構成と教育課程編成
 - ・鳥羽商船においては、平成 31 年度改組（工業系）に向けて検討を開始
 - ・鈴鹿高専においては、平成 29 年度専攻科を改組（2 専攻から 1 専攻・3 コースへ）
- (2) 学生及び学生会活動の相互交流
 - ・学生会役員の高専祭（鈴鹿）、海学祭（鳥羽）、リーダーストレートニング（鳥羽）における交流、寮生会役員による寮生会交流を行った。また、留学生研修旅行における留学生交流を行った。
- (3) 両校共同による校務等の効率的運営
 - ・PR 活動については、互いの学祭、鳥羽丸（四日市港まつり、名古屋港開港祭）、中学校の巡回 PR 活動においてパンフレットの配布を実施、入試説明会においても近大高専とも協力し実施した。
 - ・入試関係においては、互いの学校を受験会場として入試を実施した。
 - ・平成 28 年 10 月 鳥羽商船主管の全国高専プログラムコンテストでは、鈴鹿高専から派遣教員 5 名の協力を得た。
 - ・平成 29 年 1 月 両校が協力し鳥羽商船を会場に高専シンポジウムを開催し、成功させることができた。
 - ・両校が必要とする厚生補導に関する規則・内規・運用規則について情報交換を行い、両校で規則の整備を行うことができた。
 - ・予算の効率化執行について意見交換を行い、物品（消耗品等）共同購入の実施に向けて検討を進めた。
- (4) 研究活動の連携
 - ・両校の教員の研究分野の特色を生かした研究活動を開始、両校の施設見学・共同利用を進めた。なお、鳥羽商船の練習船等の利用に関わる規則を整備し、鈴鹿高専が船艇を利用した研究調査を行った。
 - ・鈴鹿高専の設備を利用し、鳥羽商船主管の全国高専プログラムコンテストで使用する競技用パズルを加工した。
 - ・鈴鹿高専の受けている工業所有権センターの知的学習プロジェクトに鳥羽商船も参画した。
- (5) 教職員の人事交流
 - ・人材育成・業務の効率化を推進するため検討を重ね、平成 28 年より教職員の人事交流を実施した。なお、教員を相互に 1 名ずつ事務職員を相互に 2 名ずつの交流となった。
 - ・プログラミングコンテストに必要な材料の加工のため、本校の技術職員数名が 鈴鹿高専での加工及び両校の技術職員間で情報交換等、交流を図った。
- (6) ビデオ会議システムの積極的活用
 - ・鳥羽商船から鈴鹿高専に授業配信し、受講学生に単位を認定した。
 - ・以上の他ビデオ会議システムを活用した両校の交流事業を企画し実施した。